

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

1. 黒松内ぶなの森自然学校の取組

——地域を考えながら地球規模の行動ができる人づくり——



廃校校舎を活用した「黒松内ぶなの森自然学校」の全景



話し手：NPO 法人ねおす
理事長 高木晴光 氏

【プログラムの概要】

- 名称 黒松内子ども長期自然体験村
主催 黒松内ぶなの森自然学校
日程 平成19年7月27日(金)～8月15日(水)
19泊20日
場所 北海道寿都郡黒松内町周辺
施設 黒松内ぶなの森自然学校
対象 小学校3年生～中学3年生、30名
参加費 小学生128,000円、中学生130,000円
ねらい 自然の美しさや多様性を知り、危険への
対処、自分をみつめ人と関わることを学
び、創造的に発展的に遊ぶ工夫すること、
未知に対する勇気を養う。
(プログラム事例：202頁参照)

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——黒松内ぶなの森自然学校の活動は、いつから始まったのですか

高木 黒松内ぶなの森自然学校は、平成10年11月に北海道黒松内町^(注1)に誕生しました。黒松内町は、歌才(うたさい)ブナ林^(注2)をはじめ、朱太川(しゅぶとがわ)の清流や湿原などの美しい自然環境に恵まれた地域です。町では、こうした自然環境や地域文化を活かして、これまで自然体験型環境学習に力を入れてきました。

そうした中で、平成11年から環境庁と自治省による自然体験型環境学習拠点事業(ふるさと自然塾)が始まり、これを我々のNPO法人ねおす^(注3)が聞きつけ、黒松内町に提案し採択されました。町としては、財政的なこともあって大きな施設整備はできないというところで、廃校となっていた作開(さっかい)小学校の校舎を拠点として活動を始めることになりました。実際の活動は、平成11年4月からです。この自然学校では、この地域の豊かなフィールドを場として、「自然体験学習プログラム事業」、「人材の育成事業」及び「地域交流促進事業」を行っています。

——この地域を選ばれた理由は何ですか

高木 北限のブナ林をはじめとする豊かな森林、それと朱太川の清流や湿原などの豊かな自然環境があること、そして酪農をはじめとする農業とその暮らしがあることです。また、昭和63年に策定した「ブナ北限の里づくり構想」に基づいて、「歌オブナ林」をシンボルとして大切に保護されてきたこと、そしてリゾート施設などを誘致しないで地域にある自然や人、酪農をうまくつなげて「環境と人にやさしいまちづくり」が進められていたことです。その他、林業や隣町に漁業があったことも我々NEOSの活動に好都合でした。そうした諸々の条件が、私たちの自然体験活動の方針とよくマッチしていてとても活動しやすいと思ったからです。

——この自然学校の運営体制はどのようになっていますか

高木 ここでの活動の拠点施設は、町の廃校校舎を借りています。したがって、大きな修理などは町で行いますが、維持管理など自分たちでやれるものは自分たちでやっています。ここは冬になるとかなり雪が積もります。機械を使った除雪は町でしますが、我々が

(注1) 北海道の西南部に位置する人口3千人余の酪農を基幹とする農業の町。日本海側と太平洋側特有の気象の影響を受け、冬は3メートルを超える豪雪地帯。町では、豊かな自然環境と地域特性を活かした地域活性化に取り組んでいる。

(注2) 昭和3(1928)年、国の天然記念物に指定された北限のブナ林。樹齢200年を超えるブナ林が92ヘクタールに亘って広がる。

(注3) 北海道自然体験学校NEOS。人、地域、自然をテーマに21世紀の暮らし方を考え、提案する。活動の内容は、環境教育、交流活動、人材育成、エコツーリズム啓発、受託事業、講師派遣など。

できることは近所の人たちと一緒にやっています。

また、この廃校校舎の行政的な位置づけは、この作開地域の生涯学習センターです。「黒松内ぶなの森自然学校運営協議会」という任意団体がこれをサポートしています。この運営協議会は、町内外の有識者 15 名で構成していきまして、その事務局のスタッフは NEOS から派遣されています。常勤スタッフは、私以外に 2 名、それから研修生がいます。研修生は通年 2 名受け入れていきまして、研修生には研修奨励金が支給されており、OJT（実務研修）のほか自然に関する知識や技術、コミュニケーションなどを教えています。



ぶなの木を抱きかかえる子ども（添別ぶな林）

——この自然学校では、どのような活動をしていますか

高木 この自然学校では、やはり地域とのつながりを大切に考えています。そこで、ここでは「地域と共に」というコンセプトを掲げています。その中で、この自然学校の事業として 3 つの事業を行っています。

一つ目は、自然体験型・地域産業体験学習事業で、この地域にある資源を活用しながら、体験型のプログラムを提供していこうというものです。

二つ目は、人材の育成事業です。これは、NEOS の大きなミッションでもありまして、自然活動とか地域交流にかかわる人材を育成しようというものです。大学とか、国際ボランティアとか、他の養成機関といったさまざまなところと連携しています。

三つ目は、地域交流促進事業で、都市と地方の交流を進めるために地域資源を活かしたエコツアーの実践、子どもを意識した地域交流活動をやっています。NEOS のもう一つのミッションはツーリズムにあります。これは、教育＋交流＝ツーリズムという考え方からきていまして、地域の資源を有効に活用した自然体験をたっぷりやろうというものです。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

最近では、地元の森林管理署の好意で国有林にも入れさせてもらっています。今まで誰も知らなかったような「ぶなの大木」を見に行ったりしています。去年は地域情報の冊子「風土を歩く」を作りまして、この地を訪れる方に提供しました。また、この自然学校の情報発信だけではなくて、地域の情報発信をしようとホームページも立ち上げています。



イタリア語講座に聞き入る子どもたち（自然学校にて）

——ところで、この自然学校はどれほどの活動規模となっていますか

高木 活動規模をどういうふうにかウントするかは難しいところですが、滞在者数としてみれば、おおよそ延5千人といったところでしょうか。1年間の山村留学を受け入れていまして、これもカウントしています。今年も、山村留学生として、兵庫県から2名、千葉県と大阪府からそれぞれ1名の4人の子どもを預かっています。

——人材の育成事業とは具体的にどのようなものですか

高木 人材の育成事業は実習を主体に活動しています。実習生としてはプロパーのほか、他の教育施設とか、体験活動団体から来ています。また、観光協会とか、学校の先生もいます。こうして、いろんなところから受け入れて、実習を通じて人材を育成しています。夏休みになると子ども対象とした活動が最も集中しますので、人材育成のいい研修の場になっています。そういう意味では、自然体験活動と人材育成事業を両輪としてうまく動かしていると言えます。

ここで知識や技術を習得した人材は、あちこちの団体に就職しています。会社を辞めて、ここで2年間の経験を積んで教員採用試験に挑戦して学校の先生になった若者もいます。また、学生のほかに社会人がいまして、さまざまな人生経験や職業経験を持った人のコミュニティを形成しています。そうした中で、互いに研鑽し、励まし合いながらスキルを高

めています。

なお、数年前から外国人も来るようになりまして、今年はイタリアと韓国から1人、台湾から3人がきています。生活習慣が違うので、いろいろと大変な面もありますが、彼らは非常にポジティブで活気に満ちています。



農家の人から野菜をいただく（黒松内ぶなの森自然学校 HP）

——子どもを意識した地域交流促進事業では、どのようなことをやっていますか

高木 この自然学校は、長期に滞在できる受入施設をもっています。また、ゲストハウスがあり、それから町営の住宅をいくつか借りています。そうした受入施設を活用して、子どもたちや研修生を長期にわたり預かることができます。現代社会では、どんどん便利になり、都会型になり、夜型になり、田舎はすっかりイメージの世界になりつつあります。いまの都会の子どもは田舎体験がほとんどありません。食べ物一つを取っても、それがどういうふうにして作り出されたのか、まったく知りません。

そこで、ここでは穀物、野菜、魚、肉など生産者がどうやって作り出しているかを見たり、聞いたり、触ったりして体験することができます。自分たちで小さな畑を作って、トマト、キュウリ、タマネギなども育てています。そうした活動を通じて、子どもに生の体験をさせています。子どもの早い段階で、牛のにおいとか、堆肥のにおいとか、収穫したばかりの野菜の香りとか、あるいは獲れたばかりの魚の姿とか、そういう生の感覚を擦り込んでおくというのがとても大切だと思います。こうした体験をさせることによって、将来、物事を感じ、創造する人格をもった人間が育つと思っています。

そういう意味で、田舎の体験は子どもの人格形成においてとても必要なことだと思うのです。ここはそうした自然環境がバランスよく整っています。都会の鉄やコンクリートの社会環境では決して望めない、できないことを実践しています。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——長期自然体験村では、具体的にどのようなことをやるのですか

高木 子ども長期自然体験村は、小学校3年生から中学3年生までを対象にした19泊20日のプログラムです。テーマのキーワードは「大家族」「全開遊び」としています。

「大家族」のねらいは、子どもたちが多くの人に出会い、ふれあいながらいろいろなことを学びとることにあります。子どもたちが合宿生活をする中で、喧嘩をしたり、泣いたり、笑ったり、怒ったり、悲しんだり、いろんな状況でコミュニケーション力を作り上げていきます。そして、人への思いやり、協力すること、自己の表現などを身につけていきます。学年が違う子どもたちをはじめ、専門のスタッフ、ボランティアの高校生、大学生、社会人、外国人、そしてお爺ちゃん、お婆ちゃんなどで構成していきまして、大家族のような大きなコミュニティを構成します。その中で、自然と人、人と人とのさまざまなかかわりを学びます。



札幌、千歳から到着した子どもたち（黒松内ぶなの森自然学校 HP）

「全開遊び」のキーワードは、自然の中で思いっきり遊びながら、自然の美しさ、不思議さ、怖さなどを体験します。そこで想像、創造、勇気、危険への察知や対処などを養っていきます。

長期自然体験村のプログラムは大きく3期に分かれています。一期目は、子どもたちとスタッフなど全員がコミュニケーションを意識した1週間です。このため、全員で同じ所に出かけて、そこで活動を展開します。例えば、ぶなの森とか、海とか、磯とかに全員で行って一緒に行動します。いわゆる人間同士と言いますか、コミュニケーションづくりというのが第1期目のねらいです。

第2期目は、森や磯の観察とか、川での飛び込みとかを体験します。ここからは、グループをつくって、それぞれ行き先が違います。あるグループは森へ、あるグループはカヌーへ、あるグループは農家などへ行きます。こうしたグループ毎の活動を4、5日やりません。



朱太川でのカヌー体験（黒松内ぶなの森自然学校 HP）

第3期目は、それまで体験してきたものを土台にして、子どもたちが中心になってグループをつくり、自分たちのやりたいことを計画し行動します。スタッフは「こんなところがあるよ」、「こんな道具があるよ」といった情報提供をします。子どもたちが話し合っ、「こんなことをやりたい」とスタッフにプレゼンテーションするのに1日、それが決まると子どもたちは計画づくりにとりかかり、これに1日かかります。食料とか、装備とか、行動とかの具体的な計画づくりをし、それをスタッフが少しずつアップさせてチャレンジ的なものに作り上げていきます。こういう準備作業のために2日間という時間をかけます。そして、いよいよ3日目から2泊3日の行動に入ります。



往復 50km を歩いて野趣たっぷりの秘湯を捜す「クマっちゃわないうように秘湯へGO」チーム（黒松内ぶなの森自然学校 HP）



太平洋から日本海へ40kmを歩きとカヌーでチャレンジした
「ロングウォーク沈道中チーム」(黒松内ぶなの森自然学校 HP)

——子どもたちの自立性を養っていくということですか

高木 そうです、子どもたちの自立性を育てるということです。そのために、まず、人間関係を築きあげ、自然を知り、その上に立って自分たちがやりたいことを実現する、あくまでも長期体験活動の主役は子どもです。スタッフはそれを支えるサポートが役割です。

これまで9回やっていますが、最初のころはスタッフがどうしても力づくでやらざるを得ないところがありました。子どもたちだけでは何をやるか分からないので、やはりスタッフが口を出してしまう。しかし、今ではリピーターの子どもの半分ぐらいいますから、子どもたちの自主性に任せることができるようになりました。そういう意味では、以前よりスタッフは余裕をもってサポートできるようになっています。



施設を訪れたボランティアからゼリーの作り方を教わる子どもたち (黒松内ぶなの森自然学校 HP)

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

それから、この長期体験活動では休養日を設けています。よく学校関係者が主催するキャンプなどでは、いつも何かをやっていないといけないみたいな観念があってビッシリとプログラムが組まれているのをよく見かけます。これまでの経験からすると、休養日を設けた方が子どもとスタッフの信頼関係がより深まることが分かってきました。活動中はどうしてもスタッフと参加者の関係になりますが、休日だとスタッフや友達と一緒に買い物に出かけたり、ヤギやヒツジを連れて散歩をしたり、近くの農家に行ったりして、スタッフと子ども、あるいは子ども同士のコミュニケーションが深化します。

——長期自然体験村の参加者募集はどうしていますか

高木 インターネットで募集しています。6月の始めに募集を開始しますが、2週間ぐらいでいっぱいになります。応募は道内と道外が半々で、道外は関西圏が多く、四国や九州からも来ています。



ぶなの林を案内するスタッフと子どもたち
(添別ぶな林)

長期にわたる体験活動となると、やはり保護者の負担問題が大きく影響します。昨年までは、「子どもゆめ基金」の助成金がありましたので参加費を抑えることができ、3日間ほどで埋まってしまうほどの人気がありました。しかし、いろんな事情から今年は思い切って単独でやることに踏み切りました。このため、小学生の場合は12万8千円、一日当たり6千4百円になりました。このほか、札幌駅や千歳空港までの送迎費用は別途いただいています。

こうした事情から、昨年まではスタッフに報酬を支給できたのですが、今年が厳しくなりました。そういう意味で、長期にわたる体験活動では、参加費を如何に設定するかが大きな課題です。安く抑えれば参加者を集めることは容易になるかも知れませんが活動の維持運営が難しくなる。逆に、採算性を考えて設定すれば募集が難しくなるというジレンマがあります。その辺のバランスをどうとっていくか、全体の収支状況を考えながら主催者が知恵を出すところですね。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——長期自然体験村以外では、どのようなプログラムがありますか

高木 子どもを対象にした月例プログラムを毎月第2土・日曜日にやっています。このプログラムの参加者は、距離的に札幌圏が中心です。金曜日の夜に札幌からバスが出ていまして、子どもたちが30人ぐらい集団でやってくることもあります。土曜日をまるまる使い、日曜日の午後にバスで帰るという具合ですね。実質的には、2泊2日コースといったところでしょうか。森林管理署の職員に案内してもらって国有林の中にある大きなぶなの木を訪ねました。また、森林管理署の了解をもらって「ぶなの稚樹」を採ってきて、森に植えるプログラムもやりました。

今年からは、幼児の親子を対象にしたプログラムを始めています。これはほとんどが町内や近隣町村に住む親子です。その他、大学のゼミの受入れとか、学校の宿泊体験の受託もやっています。これは毎年4、5件ほどでしたが、最近は問い合わせが多くなっています。

——ところで、自然学校の収支状況はどうなっていますか

高木 ぶなの森自然学校は運営協議会方式でやっています。年間の予算規模は1千5百万円ぐらいです。この中から自然体験活動にかかるすべての費用を賄い、NEOSのスタッフの人件費を支払なければなりませんから、収支面ではかなり厳しいものがあります。

そこで、まず地域の人からの信頼と地域貢献をすることを基本にしています。そうした中で、町の学校施設を使わせてもらうことで運営収支の軽減につなげています。

また、この学校はこの地域の宝ですから地域の人がか大切にしていまして、地域の人たちの「思い出」がいっぱい詰まっています。そうしたことを大切にしながら、学校施設の運営を行っています。

このように、町から学校施設を安い賃貸料で提供いただいていることも大きな力になっていて、参加費を安く抑えることにつながっています。

また、地域の生涯学習の事務局を引き受けていますし、ここでのお祭りとか、葬式もお手伝いをしていまして、「お前らが居てくれてよかった」という評価をもらえるよう頑張っています。

例えば、付近の農家の方が来ていろいろとアドバイスしてくれますし、新ジャガイモが採れたとか、魚がたくさん獲れたとかいってわざわざ届けていただくことがあります。こうした地域の人たちの温かい物心両面の支えがあってこそ、この事業を続けていけると感謝しています。

2. 白神自然学校一ツ森校の取組

——白神山地を活用した環境教育と地元雇用につなげる——



白神自然学校一ツ森校がある木造校舎（青森県鯨ヶ沢町）



話し手：NPO 法人白神自然学校
一ツ森校代表理事 永井雄人 氏

【プログラムの概要】

- 名 称 夏休みこども田舎暮らし自然体験塾
平成18年度子どもゆめ基金助成事業
- 主 催 NPO 法人白神自然学校一ツ森校
- 日 程 平成18年7月27日(木)～8月3日(木)
7泊8日
- 場 所 青森県西津軽郡鯨ヶ沢町一ツ森町
- 施 設 白神自然学校一ツ森校
- 対 象 小学校～中学生、20名
- 参加費 25,000円（宿泊費、交通費、食事、保険料）
- ねらい 白神山地の自然を活用して子どもたちの環境教育に役立たせるとともに、地元住民の雇用につなげる拠点としたい。
- （プログラム事例：203頁参照）

——白神自然学校は、どのような経緯から設立されたのですか。

永井 今でこそ白神山地は世界遺産として有名になっていますが、以前は地元の人たちでもよく知らない無名の山地でした。そうした中で、春秋林道問題^(注)が持ち上がり、後の自然保護、環境問題として知られるようになりました。そうしたことが基盤となって、平成5年12月、白神山地は屋久島とともに世界遺産に登録されました。



津軽峠からみた世界遺産の白神山地（青森県鱒ヶ沢町）

その年に、「白神山地を守る会」、「白神植樹交流会」という会が発足し、それ以来、この会にかかわっています。いろんな人が尋ねてきて、「白神の自然保護とは一体何か」ということがよく議論になりますが、結論としては「白神の自然保護運動は、破壊されたところを植林し、復元・再生していく活動」ということになります。

具体的な活動として、ブナの実を拾い集め、苗床で苗を育て、山に戻すという取り組みを始めました。ところが、この活動に集まってくるのは、地元の人ではなく青森県以外の人がとても多かったのです。白神山地で長い間林業にかかわってきた人や春秋林道問題にかかわってきた人たちではなく、他から来た人たちが中心となって活動をやるようになったのです。これでは、長い目で見たとき、本当に白神の山を守ることになるのか、という危惧を感じていました。

(注) 秋田県八森町と青森県西目屋村を結ぶ全長 28.1km の林道として計画されたが、鱒ヶ沢町の赤石川源流を通るルートに変更したことなどから住民反対運動が起こり、着工から 8 年目で工事が中止された。これが、マスコミにとりあげられ、国民的な自然保護、環境問題の関心事に発展した。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

そうした中で、赤石川流域にある町立一ツ森小学校が廃校になるという話が出てきました。そこで、その廃校校舎を活用して、地元の人たちが山とかかわる活動ができないものかと考えたのです。そうした考えを地元の人たちに話したら、「林業とか、山菜料理とか、山の暮らしとか、これまで山と深くかかわってきたことだったら自分たちにもできる」ということになったのです。そこで、「山の暮らしに根ざしたメニューを生かした自然学校を発足してみよう」という話に発展していきました。

平成15年3月、一ツ森小学校が閉校になりましたので、町の協力を得て、その年の10月に「一ツ森自然学校」を発足しました。そういう経緯がありますから、自然学校の講師陣は基本的に地元の人たちが支えとなっています。

——廃校校舎を活用して、手作りで自然学校を運営する仕組みは、大変ユニークですね。この自然学校では、どのようなメニューとして取り入れていますか。

永井 基本的には、地元の人たちが持っている山・川の知恵というものを、うまく自然学校のメニューに取り入れるようにしています。例えば、白神山地が世界遺産となった歴史とか、この地域の伝統的な文化、赤石マタギの話など白神山地のブナ林と密接にかかわった山村の歴史をわかりやすく紹介しています。この地域は、白神山地の核心部分を源流とする赤石川が日本海と繋がり、それが一つの水系を形づくり、そこに住む人々のさまざまな暮らしがあります。こうした自然や暮らしを、青森県内だけではなく都会の人にも知ってもらおうということで、インターネットを活用して自然情報を全国に配信しています。

——昨年は、全国的にブナの実がたくさん実りました。白神ではブナをどのように育てるのですか。

永井 ブナの実は4年から5年ごとに豊作となりますので、その年にブナの実を採集し、秋に種を蒔いて、翌春に芽をだしたものを育て、秋に根の先端を4分の1ほど切り落とします。そうすることによって、上に伸びる力が強くなります。こうした作業を4、5年繰り返して幹周りが丈夫な苗を山へ戻すのです。

このやり方は、青森県林業試験場が、もう十何年もかけて試行錯誤の末、編み出した方法です。最初の頃は、山に植えつけた苗がほとんど根付かないということがありました。また、せつかく伸びた稚樹の先端が鋭い刃物で切ったようになっていることもありました。これは後で分かったことですが、残雪の上に出たブナの新芽をウサギが食べていたのです。ブナの天敵はウサギだったのです。そこで、現在ではウサギに新芽を食べられないようにネットをかぶせることをやっています。ブナの稚樹が大体1.5m以上に成長すれば、ほぼ7、8割は食べられないようです。



ブナの実を拾い集め、苗床で苗を育てたブナの実生苗。秋に根の先端を切り落とす作業を4、5年繰り返して丈夫なブナの苗木に育てる。
(青森県鯉ヶ沢町)

——ブナは、なかなか人手では育ちにくい木らしいですね。そういう意味で、白神自然学校で行われている事業は、大変興味深いですね。ここでは、ブナの苗木を販売しているということを知りましたが——。

永井 全国には、ブナを育ててみたいという方がいますので、そういう方にはブナ苗を販売しています。自分の家の庭に植えている人もいますが、ある程度まで育てそれを白神に植える方も少なくないですね。

先日は、新潟のある土木会社から300本ほど注文を受けました。白神自然学校のホームページをみて、ブナの苗木が販売されていることを知り、雪で全滅したブナの森を復元したいとのことでした。

——ブナの植林活動を通じて、全国に輪が広がっているのですね。ところで、ブナの植林活動のほかに、なにか林業体験活動をやっていますか。

永井 白神自然学校の近くに、国有林の「白神自然学校遊々の森」を11haほど借りています。ここでは、主に杉の間伐をやっています。現在の日常生活の中では、なかなか木を切るという機会はありませんので、親子で木を切る、子ども同士で切るという体験活動をやっています。

そうした体験を通じて、森の仕組み、林業を肌で理解してもらいたいと思っています。切り倒した杉の木の皮を剥ぎ、丸太に切って運び出し、加工して木工品を作っています。その他、近くの雑木林を使って、炭焼き体験をやっています。炭焼き小屋は、以前にマタギが造ったものを活用し、炭焼窯は赤土を使った昔ながらの本格的な炭窯を使っています。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

炭焼き体験は、地元の資源を使った自給自足の生活を体験してもらうことがねらいです。そうした山村の暮らしを、いまの子どもたちに伝えることができればと思っています。将来は、こうした施設を整備していきたいと思っています。



切り倒した杉の木の皮を剥ぎ、丸太に切って運び出し、木工品の材料とする。(青森県鮎ヶ沢町)

——子どもたちが学校で教えられていることは、「木は切ってはいけない」という固定観念があるようです。体験学習などで間伐をするとき、「エー、木を切ってもいいのですか」と怪訝な顔をする子どもが少なくありませんが。

永井 この地方では春先にリンゴのスグリ（摘果）をしますが、山の間伐も同じことです。小さな実を摘むことで大きいリンゴを作る、間伐をすることで立派な木を育てる、そのためには実を摘んだり、木を切ったりすることが必要だということを子どものうちにキチンと教えることが大切だと思いますね。

——ところで白神自然学校では、どのような組織体制でやられていますか。

永井 白神自然学校では、毎年度理事会を開いてその年度の方針を決めるほか、地元の人たちとの交流会を通じて直接意見をもらうようにしています。職員は、基本的に地元の人を採用しています。特に、地元の婦人会が大きな力となっています。当初は、2つの集落に限っていましたが、現在は4つの集落に広げています。それぞれの人たちが持っている得意な能力を生かしてもらっています。その他、活動リーダーが不足する場合は、国際ワークキャンプ（NICE）にボランティア派遣を要請しています。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——白神自然学校では、どのような広報活動をされていますか。

永井 この地域では、インターネットを使う環境がまだ整っていません。このため、今でもISDNしか使えない状態です。今は、自由に使えるようになりましたけれども、初めは職員のインターネット研修から始めなければならない状態で、大変苦労しました。おかげさまで、昨年2月、環境活動パートナーシップ推進事業で最優秀賞、あおもり農村整備広報大賞で優秀賞をいただくところまでできました。

そのほか、今年から県教育委員会とタイアップして、地元の子どもたちに世界に誇る白神の世界遺産を知ってもらおうという活動を始めました。また、小学校5年生を対象とした社会の教科書の中で、白神山地というコーナーを担当しまして、白神山地にある山、川、海の繋がりを説明し、いま自然保護のために植林運動が始まっていることを書きました。こうしたことを、まず県内の子どもたちに知ってもらうことを働き掛けています。

——地元の子どもたちの参加は、どのようになっていますか。

永井 地元の子どもたちからすると、普段から見慣れた山や田園風景ですから、その価値はなかなか理解されないものです。これは、大人でも同じことが言えます。そういう中で、昨年からは地元の赤石小学校、南金沢小学校、中村小学校の児童が参加しました。今年、鱒ヶ沢高校の生徒が始めてブナの植樹活動に参加してくれました。

来年からは、西津軽郡の小学校の児童が参加することになっていますし、さらに県の教育委員会との間で弘前市、青森市内の学校が参加する話が進んでいます。



修学旅行に訪れた子どもたちを案内するスタッフ（青森県西目屋村）

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——自然を体験していない親の世代がだんだん増えてきて、自然を教えることができない。また、核家族化して教える世代が身近になくなっています。

永井 今では、子どもの虐待をはじめとして、社会の仕組み自体が子どもたちを育てる環境にないですね。例えば、川に行っても川遊びができない。親がまず遊んだことがありますからね、林業体験などもそういうことが言えます。

一番感じるのは、教師にそうした経験が少なくなっていることです。総合学習のプログラムをつくるにしても経験がありませんから、地域の人たちに丸投げしてしまう。その一方で、「あれしちゃいけない」、「これしちゃいけない」、「何しちゃいけない」と言ってきます。そういうことから、教師と子どもたちの関係を一旦断ち切ったうえで、そこから始めないと何もできないのです。

最近の教師は、頭脳的には優秀な人が多いのですが、自然体験が乏しく、山や川に立ち入ること自体に恐れを感じ、自然は大変危険だと認識しています。また、事故が起きた場合の責任問題とか、それらのことを考えるとなかなか踏み込めないのが実情のようです。



ライフジャケットを付けて川遊びに興じる子どもたち（青森県鮭ヶ沢町）

——長期自然体験に参加した子どもたちの意識の変化について、何か感じていますか。

永井 我々が小さい頃は、齢の上の子が大将になって、下の子の面倒を見ていました。遊ぶにしても、喧嘩をするにしてもルールがあって、上下関係がキチンと出来ていました。しかし、今の子どもたちは、自然学校に来たときは、上の子に対して「何々君」などと呼んでいます。それが、だんだんと日を重ねるようになって、年上の子が一目置かれるようになり、いつの間にか上下関係ができ上がっています。2、3日も経てば、年上の子に年下の子がぞろぞろくっついて歩いているシーンをよく見かけます。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

つまり、最初は友だち関係であったものが、上下関係というか、仲間のなかでの立場、役割というものを互いに認識するのでしょうか。全く知らない子どもたちが一緒になってコミュニティー社会をつくり上げていくのだと思います。たとえ短い日数であっても、子どもたちが自然に順応し、そういう能力を発揮することは素晴らしいことだと思いますね。

——学校の子どもたちが、自然学校を訪れるのは総合学習としての位置づけですか。

永井 それは、いろいろあります。東京都杉並区の場合は、教育委員会とタイアップして、夏休みを利用した総合学習の一環としての宿泊研修という位置づけです。その他、修学旅行として受け入れるという自然体験学習というものがあります。修学旅行ですと、首都圏では東京、神奈川、埼玉、千葉です。それ以外では、札幌、山形からの子どもたちを受け入れてきました。



夏休み子ども自然体験塾に参加した東京都杉並区の子どもたち

——そういう意味で、「白神」というのはすごく知名度があるということですね。

永井 世界遺産という知名度はすごいと思います。当初は、修学旅行で大勢の子どもたちが一度にきたらどうするか。大勢の子どもたちがこの地に来たら、また自然破壊になるのではないかという心配の声が上がったほどです。そこで、我々は幾つかの小グループをつくり分散して活動することを考えています。例えば、林業体験プログラム、山菜料理プログラムなど、細かなプログラムを作るなどです。

——修学旅行の場合は、宿泊はどうされるのですか。

永井 今のところ修学旅行の場合は、旅館やホテルを利用しています。しかし、先々はこの地域の農家に民宿にして、農業体験や農村の暮らしを体験する修学旅行を受け入れるグリーンツーリズムの方向を考えています。現在、農漁業体験民宿という制度を活用する

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

ことで、町と相談し、農家の人たちに集まってもらってようやく9軒できました。農漁業体験民宿というのは、1軒で大体4、5人が限界ですから、まだまだ数が足りません。

——他県の子どもたちを受け入れることで、地域の人たちの意識が変わったことがありますか。

永井 初めの頃、自然学校で夕食を出したとき、地元で客人をもてなす昔ながらの白神御膳というものを出したことがあります。たくさん料理を盛り付ければ喜ぶだろうという感覚です。ところが、子どもはビックリして多くを食べ残してしまいました。そこで、たくさん出せばいいという感覚では駄目だということが分かったのです。それよりも、おいしいものをほんの少し出せば、また食べたいという気持ちが起きてくることに気付いたのです。

ただ、自分の家に人を泊めるという気恥ずかしさ、そういう感覚からまだ脱皮していません。その意識を少しずつ変えて、本来の農家民宿のスタイルにしたいと思っています。

自然体験の一つの目的は、自給自足の生活、自然との共生、集落の人たちの生きざまを体験してもらうことです。お客さま扱いではなくて、ありのままを体験してもらいたい、自然というのはこういうものだ、こういう食べ物、暮らしがあるのだということを感じて欲しいのです。その体験は、その子どもの成長にとって素晴らしいものになると思いますから。



地元の婦人会の人たちの手による山菜料理。交代で食事を作っている。(白神自然学校一ツ森校)

——白神自然学校では、地元のご婦人たちが積極的に活動していますが、こうした活動の源泉はどこにあると思いますか。

永井 白神山地を世界遺産にするそもそものきっかけは、昭和20年の3月20日未明に起きた鉄砲水による86名の村人が亡くなったことから始まっています。ですから、赤石

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

川の上流部に林道ができて、ブナ林が切られてしまうと、またおびえた生活をしなければならない、そういう危機意識が根底にあって反対運動に結びついたのです。その反対運動の異議意見書を青森県知事が受け入れて、森林生態系保護地域に指定し、もっと法的な規制の網を掛けようということで世界遺産に登録されたのです。

一ツ森校に来ている人たちは、そのときの当事者の人たちです。ただ、それまで自由に山には行って山菜などをとっていたのに、世界遺産に登録されたら法的な網がかけられて自由に山にはいることができなくなったという思いがあります。

こうしたことなどから、この地域の林業が急速に衰退してしまった。そういう意味で、もう一度別な方法で白神の山にかかわっていきたいという意識が強いのです。そのために、地域でブナ苗木を育て、それを山に戻す運動を積極的にやっています。さらに、伝統的な文化を都会の人にも知ってもらいたい、そしてもう一度息を吹き返したいという願望をもっているからだと思いますね。



赤石川の源流部にある白神山系（青森県鯉ヶ沢青岩展望台）

——都会の子どもたちが訪れることが、地元の励みに繋がっているのでしょうか。

永井 昔からあった小学校はなくなったけれども、全国から子どもがやって来る、そして自分たちが精魂入れて作った料理を「おいしい」と食べてくれる。澄んだ空気、清冽な水が育てた新鮮な野菜を喜んで食べてくれる。これは、この地域の農家の人たちにとって大変うれしいことです。それは生きがいにもなっていますし、もちろん収入にもなっています。また、酒かすを使った「白神まん」というオリジナル菓子を作りあげました。これらは、地元の人たちにとって励みとなっています。

この地域では、かつては都会に出稼ぎに行ってお金をたくさん稼いでくる人が一番偉いという考え方がありました。今では、幾つになっても自分を必要としてくれる、孫に小遣

いをあげることができる、孫が「おばあちゃんは、すごい」と言ってくれる、そういう声があちこちから聞こえてきます。家の中で大事にされるのが、大変な喜びになっているみたいですね。

——そういうことになるまでには、どれほどの年数がかかったのですか。

永井 平成10年に、一軒家を一ツ森地区に借りまして「白神山地を守る会鱒ヶ沢事務所」を置き、そこを前線基地として8年間活動してきました。当時、オウム真理教の事件があったときでしたから、オウム信者が逃げてきた、とうわさされたこともあります。そういう中で、町が廃校校舎を提供してくれたことは、とても助かりました。これがなければ、いまの自然学校は無かったと思います。校舎は町から無償で提供を受けていますが、屋根のペンキ塗りなどの維持は自然学校が自前でやっています。

ある時、鱒ヶ沢町長に呼ばれまして、今まで漁業中心の町としてやってきたが、これからは町長の公約として白神とかかわった町づくりをしたい。ついては、町の職員を対象に研修を開くので、「白神山地を生かして何ができるか、あなたが考えていることを述べて欲しい」と言われたのです。町がやろうとする町づくりの方針と私がやろうとしていた方向が一致したのです。そうした経緯があって、廃校校舎を無償で提供してもらい、地元と一緒に活動することができたと思っています。とにかく、町の施策とピッタリと合ったとことが、とても大きいと思っていますね。

——7泊8日の「こども白神山地自然体験塾（夏編）」の参加料は、2万5千円に設定されていますが、これですべての運営ができるのですか。

永井 この事業は、子どもゆめ基金^(注1)の助成金を受けて実施しています。誰でも参加しやすいように、あえて参加費用を低く設定しています。

首都圏から参加する子どもたちは、新幹線と飛行機を利用することになります。最寄の駅や空港までは送迎していますが、基本的には自前となりますから、交通費まで含めてできるだけ親の負担にならないように考えています。それにしても交通費はかなりの負担になりますね。

こうした一連の取り組みが高く評価されて、平成16年度に「オーライ！ニッポン大賞」^(注2)を受賞しました。今後とも、インターネットを活用して、白神自然学校の情報を発信し続け、この地域の活性化につなげていきたいと思っています。

^(注1)子どもの健全な育成の推進を図ることを目的に、民間団体が実施する特色ある取組や体験活動等の裾野を広げる活動について支援。実施は、(独)国立青少年教育機構。

^(注2)都市と農山漁村の共生・対流の優れた取組を表彰し、国民への新たなライフスタイルの普及定着を図ることを目的として、オーライ！ニッポン会議などが主催。

3. イーハトーヴォ安比高原自然学校の取組

——自由な発想で子どもの素直な心を発見する——



キャンプに参加した子どもたちとスタッフ（安比高原スキー場）



話し手：イーハトーヴォ安比高原
自然学校校長 齊藤文明 氏

【プログラムの概要】

- 名 称 2006 夏安比高原「ATOM キャンプ」
平成 18 年子どもゆめ基金助成事業
- 主 催 イーハトーヴォ安比高原自然学校
- 日 程 平成 18 年 7 月 23 日(日)～7 月 25 日(火)
2 泊 3 日
- 場 所 岩手県八幡平市安比高原
- 施 設 ルーデンス農場、安比高原キャンプ場
- 対 象 小学校 3 年生～6 年生、7 名
- 参加費 13,500 円
- ねらい 安比高原の大自然の中でたくさんの人と
ふれあい、物事や相手のことを真剣に考
え、心を開いて自分の思いを伝え、仲間
や自分の考えや価値あるものを創り出す。

——自然学校に使われている「イーハトーヴォ」とは、どういう意味ですか。

斉藤 宮沢賢治の作品の中に「イーハトーブ」とか、「イーハトーヴォ」という造語がでてきますが、これは理想郷という意味で岩手県のことを指しています。宮沢賢治のフィールドワークから出てくる自然の見方とか、感じ方とかを参考にして変革をやるという意味で、宮沢家から名前をちょうだいして付けています。

当校が活動しているフィールドは、岩手県西部の国立公園八幡平に連なる前森山と西森山のふもとに広がる標高1300～1500mの安比高原にあり、日本でも有数の広大なゲレンデを持つ安比高原スキー場をはじめ、ゴルフ場、牧場及び民宿などがあります。

——この自然学校は、どのような趣旨で設立されたのですか。

斉藤 我々の「イーハトーヴォ安比高原自然学校」は、平成14年4月にスタートしました。宮沢賢治の自然観に学び、「自然と人間関係」、「地球環境」について、体験を通じて学ぶ場を提供することを目的としています。子どもの健全な育成がテーマです。

我々の会社は25年ほど前からスキー場の開発と運営をやって来ましたが、だんだんスキー人口が減ってきています。特に、若い人が減ってきています。世の中の人口構成が変わっていく中で、将来の日本とか、地域のことを考えるとき、子どもが健全に成長していくのが非常に大事だと考えています。そういうことから、この自然豊かで理想郷でもあるフィールドを通して、健全に子どもたちが成長してくれることが私たちの願いです。

このことが、一面では地域の活性化にも繋がるものと考えています。むろん、観光事業からも必要なことですが、これからの日本を支えていく子どもたちがこうした自然豊かなところで、そこに暮らす人たちと触れ合っ、その価値観を感じ、成長するということが大事だし、それが求められている時代ではないかと思えます。「自然と人間関係」という面からは、この地域にはまだ昔からの自然の中で暮らす文化が残されていますから、そういう人たちと触れあうことで、子どもたちの心に何らかの影響を与えることができればいいと考えています。



コミュニケーションづくりをする子どもたち（ルーデンス農場）

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——今回の ATOM キャンプに参加した子どもたちに動機を聞いてみましたら、ほとんどが自分の意思で来たと話してくれました。その理由を聞くと、「お兄ちゃんが参加していたから」、「続けて参加しているから」、「友達に誘われて決めた」とか、とにかく自分の意思で決めています。そういう意味で、子どもたちの前向きな姿勢に感動しました。ここらに自然体験活動の成果が出てきていると感じました。

斉藤 我々のスタッフとしては、そうした前向きな姿勢が大事だと思っています。活動や遊びを通じて、我々が子どもたちに教えられることが多いですね。



自分の意思で参加したという子どもたち（ルーデンス農場）

——子どもたちの行動を見ていて、非常に素直ですね。よく言われている子どもとはまったく違う。こういう環境の中では、自然に素直な気持ちになるのでしょうか。どのような子どもを対象に、どのようなプログラムを提供していますか。

斉藤 年間を通じてみると、対象者は結構変わりますね。我々の活動はソフトサービス事業の提供ですから、誘客なり、それなりの集客効果の高いものが中心となります。その中で、一番は体験学習の場の提供サービスです。具体的には、修学旅行だったり総合学習だったりしますが、そういうサービスを学校側に提供することです。この事業を始めて5年になりますが、徐々に浸透して利用者が増えつつあるという実感を持っています。

対象者は、小学生、中学生、高校生あるいは大学生ですが、やはり子どもの成長に応じて提供するプログラムは違います。ますます都会化、便利化する生活にドブプリ漬かっている子どもたちに、我々が提供できるサービスというものは結構あると思っています。自然にふれるとか、人とのコミュニケーションとかを提供する機会は重要と感じています。これは、ある意味では現代社会の問題でもあります。

——子どもたちが自然に親しむ年齢は、どれくらいからが適当と思われますか。

斉藤 できるだけ年齢が低いうちから自然に親しむことが理想です。年齢を経ると親の考え方に影響され既成概念が出来上がってきますからね。今までの経験からすると、自然学校に入って来る子どもたちというのは、自然に対する関心、意識が比較的高い家庭の子どもが多いですね。高校生ぐらいまでは意外と素直です。少し問題がありそうな子どもでも、我々が本当に真剣な気持ちで接すると子どもは素直になってくれます。これは、これまでの経験から自信を持って言えます。

——子どもが素直になるのは、ここの自然環境がそうさせるのですか。

斉藤 自然環境という面もあると思いますが、多分にこの地域に住んでいる人たちの心にふれあうことが影響しているのではないかと思います。例えば、そば打ち体験プログラムでは、地元のおばさんたちが指導してくださるのですが、どんな子どもでもおばさんたちの前では正座してしっかり聞いています。そして、真剣にそば粉を捏ねたり、切ったりしています。それをどう見るかですね。意外と学校で問題を起こしている子どもが、そば粉の捏ね方とか、切り方とかうまいのですよ。そうした光景をみると、人は一面的にみるのではなくて、どこかにいいところ持っているのだな、大事なものを持っているのだな、ということが見えてきます。

そういう意味で、我々がすべて指導するのではなくて、そういう気持ちにさせる雰囲気大切ではないかと思っています。この辺は、この地域が持っている独特の価値だと思っています。昔から厳しい生活環境の中で、自給自足の文化をずっと続けてきましたからね。この地方の方言を交えながら、優しく、人の心を包み込むような喋り方、そういう雰囲気がまだ残っています。ここには、都会の普段の生活ではすでに失われた日本人の心が残っています。そこに、「おばあちゃんパワー」といいますか、人の優しさ、素直な気持ちというものを感ずるのではないかと思います。



そば打ち体験をする子どもたち（安比高原の民宿施設）

——本来、人はそれぞれにいいものを持っているということですか。

斉藤 親や学校側からみると、それぞれの子どもたちが持っているいいものが見えにくい時代になっています。人の価値というものは、「人のために何かをしてあげる」、「互いに手助けあう」とか、そういう面に価値があると思います。しかし、現代の、特に都会の生活の中では、その辺のことが価値として評価されないし、また見せる場がない。学校の成績とか、勉強の態度とか、クラブでの活動とか、そうした一面だけで評価されています。真の人間性というものが、評価されにくくなっていると思います。

そこを引き出して、それを他の人たちに認めさせてあげる、そういう場面づくりが必要だろうと思います。そこまで持っていくには、ちょっとしんどいとは思いますが、そういう気持ちを持って活動することが大切だと思っています。そこを育ててあげないと、日本人のDNAがだんだん失われて廃れてしまう、どんどん閉塞感に入って精神的におかしなことになる、そういう気がしますね。

——ここで自分を発見する機会を提供するということですか。

斉藤 私たちが育った時代は、貧しくてもみんなで将来に対する夢を見ることが出来た。しかし、これだけ豊かな時代になっていると言われながら、「将来が見えにくい」、「夢が持てない」、「閉塞感を感じる」といった時代となっています。また、情報社会、競争社会の中で、「人とのコミュニケーションがうまくとれない」とか、家庭、学校、地域の中で人間関係がうまくいかないとか、若い世代を中心に大変まずい兆候が見られます。

本来、子どもたちの価値観は多様であっていいと思いますが、あまりにも一面的で、それに合わない子どもたちがどんどん外れていってしまう。そういう社会はいたたまれないと思いますよ。それぞれの子どものいいところを見つけ、認めてあげるような場面を作らないと、子どもは自分の心を表に出せないと思います。



動物に接する子ども。やさしい心を持つ自分を発見する（ルーデンス農場）

——ところで、今回の調査のテーマは、「森林を活用した長期自然体験活動を推進するための方策」を検討しようとするものですが、長期にわたる活動となると時間的、金銭的にも、また受け入れ側としても、それに応じた体制、準備が必要となります。この辺について、どう考えていますか。また、どれほどの時間、日程が必要だと思いますか。

斉藤 私は、時間という問題よりも、いかに環境を設定するとか、そしてそれをきちんと見てあげる指導者がいるかどうか、重要だと思っています。確かに期間は長いことに越したことは違いありませんが、時期的、時間的に制約がありますし、金銭的にも親に負担がかかりますからね。

そういう制約の中で理想に掲げているのは、この麓の民家を使ったキャンプがいいのではないかと考えています。そこには昔からの生活があり、文化があり、互いに助け合う人の和があります。そうした雰囲気の中で、子どもたちが総合的な体験をすることがいいのではないかと考えています。子どもの心を開かせるには、受け入れてくれる農家、そこに住む家族にふれあうことがいいのではないかと考えています。

同時に、この地域も過疎化していますから地元も元気がでます。地元の人たちがこれまで育て継承してきたさまざまな文化を子どもたちに教える場面があってもいいと思います。そういう雰囲気の中で、一人ひとりの子どもの心に影響する面が、多分にあると思っています。

——自然体験活動では、リーダーの役割が重要になりますが、ここではどのようにリーダーを育てていますか。

斉藤 もちろん、リーダーを育てることは大切なことです。ただ、すべてを自分たちで育てあげるには限界があります。そこで、ここでは、この地域の資源を大切にしながら、そこに住む地元の人々の力を借りながらやることにしています。

今回のようなキャンプスタイルにしても、限界が出てきます。夏場の長期キャンプとい



ATOMキャンプを企画した
佐藤百合さん

っても、そこにいるリーダーがどうやって生活していくかという問題があります。優秀なリーダーを受け入れる体制とか、採算性とか、生活の問題とか、そういった諸々のことを考えなくてはならないのです。

そこで、リーダーの役割は、子どもと地元資源をうまく繋ぐコーディネーターが一番大切だと思っています。この地域の資源を有効に活用した長期滞在の価値を引き出すのは、やはりコーディネーターが一番です。また、数少ないリーダーで運営していますから、何を優先してやっていくか、限られた経営資源を見ながら考え、できるものからやっています。

キャンプを本格的に始めたのは3年前からです。今回

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

のキャンプは佐藤百合が企画して実現しました。実際問題として、人を集める、体制を整えるには限界があります。そういう事情から、まだそんなに活動をしている訳ではありませんが、状況を見極めながらすすめていきたい。今回のキャンプの成果が一つの答えになるのではないかと考えています。

一方で、企業経営の立場からすると、子どもの体験活動はパワーがかかる割には収益にはなりません。したがって、企業活動としてはもう1歩踏み出せないというジレンマがあります。やるからには、企業として何らかのプラス効果がなければ進めないのです。

——継続的にやるためには採算というものが、大前提ということですね。

斉藤 しかしながら、この地域の観光ビジョンとか、地域の活性化とか、教育環境の問題とかを考えていくと、この地域の文化を守りながら人を育てるということは非常に大切なことだと思います。今回のキャンプは一つのきっかけだと思っています。2泊3日のキャンプでも毎年来てくれば良いと思いますし、そう考えていくとある面では何とかできるのではないかと。ただ、ここまでのアクセス、交通費が一番のネックですね。

——参加者は、どの地域から来ていますか。

斉藤 地元の盛岡市からの参加者もありますが、やはり首都圏が一番多いですね。首都圏から夜行バスを走らせることも考えられますが、そうすると一定の募集人員、参加費、受け入れ態勢などいろいろ解決しなければならない問題があります。首都圏から高い交通費を払って来るとなると、もっと長期にわたる企画ができないかという気もあります。



心を開いて自分の思いを人に伝える子どもたち（ルーデンス農場）

——自然体験活動のプログラムについて、どう考えていますか。

斉藤 自然体験活動のプログラムとしては、自由な発想の中で、子どもの遊びが創造できるような環境を整えてあげたいと思っています。自分たちで、興味をもって工夫しながらやっていく、そうしたものが結構あるのでないかと思っています。もともと、子どもは未知なものに対して興味を持っていますから、そういう面を生かしていければと思っています。

一方で、地域の人たちがどこまで自然体験活動を受け入れてくれるのかという問題があります。また、間もなく団塊の世代が定年退職を迎えますから、そういう方々の協力が得られればと思います。そういう意味で、我々ができることは、地域

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

の資源、伝統文化、そこに住む人などをどのように結びつけていけるか、その場面を作ってやることだと思います。

そこで体験した子どもが、また来てくれればいい、故郷と思ってくれればいい、そういう長い視点で見ていくことが大切ではないかと思っています。その中で、自然に親しんでもらえばいい。

——都会に住んでいる子どもの中には、故郷を持たない子どもがたくさんいます。そういう子どもたちの故郷づくりということですか。

斉藤 子どものときに体験した活動をきっかけとして、いずれ家庭を持ったら子どもを連れて来る、そういう10年、20年先を見据えた戦略が大切だと思っています。そういうことができるのは、この地域に住んでいる人でないとできない。長く地域に住んでいる人でなければ、本当に地域の文化を知ることができないと思います。そういう意味で、我々がやるしかない。地元だからこそ、ここで培ってきた経験が生きているわけです。また、地域の人たちの協力を得られるかどうか、そこで分かります。



森の中で、ブナの生態について学ぶ子どもたち（ブナの森）

——地域には、どういう働きかけをしていますか。

斉藤 修学旅行の体験学習というのが、いいきっかけづくりになっています。地域の人々がどう反応するかを見極めながら、ではこれをやってみましょうという形で進めています。そうやって、ようやく地域の人たちにも我々の取り組みが理解されてきました。

今後は、地域の自立ができればいいと思っています。双方にとってどういう形で進めたらいいのか、持続的な活動として波及するためにはどうしたらいいのか、長いスパンで見ていく必要があると思います。

——自然体験活動を進めるために当たって、行政にどういふことを望まれますか。

斉藤 今後、政策として自然体験活動を普及させることは、是非やって欲しいとは思いますが。しかし、それを支える人たちのことも合わせて考えていかないと、なかなか普及は進まないと思います。本気になって考えないといけない時代だと思います。豊かな生活をしているように見えても、子どもの心の問題をどうするのか、行政側として真剣に考えて欲しいですね。

——自然体験活動の社会的な役割については、どう考えますか。

斉藤 我々の会社は、リクルートを母体としています。リクルートでは、リクルートマネージメントソリューション（RMS）というアメリカ型の企業研修を開発して、大変話題となりました。しかし、会社だけの企業内研修にも限界があります。「職場のコミュニケーションの機会が減った」、「職場での助け合いが少なくなった」など心の病の増加が問題となっています。

やはり、子どものうちから、こういう自然環境の中で心をさらけ出して、互いの信頼関係を築き、人との絆を作って目的を達成する、そういう体験が大切ですね。力を合わせて、一緒に仕事をやるという体験が人を育てます。いまの厳しい社会の中で生きていくことは、非常に大変なことなのです。そういう社会に生きていける人間を育てることに、少しでも手助けできればいいと思っています。

今の若い人たちは、便利な社会になったために、「何のために生きているか」分からなくなっています。昔は、一緒に家族で農業をしなければ生きていけなかった。そういった経験を体に刻み込んだ人にとっては、どんな苦労があっても乗り越えることができた。でも、今の若い人たちは、そういう経験が皆無なので、「何でこんなことをしなければならぬのか」という疑問が先に出てしまう。「自分の仕事が誰かのために役に立つ」のだと思って頑張るような人間が増えていくことが願いです。



キュウリの収穫を喜ぶ子ども（ルーデンス農場）

——子どもを「やるき」にさせるためには、どうしたらいいと思いますか。

斉藤 やっぱり子どもは素直に喜ぶのです。「出来ないことが出来た」、「やったことがないことをやった」など子どもたちは素直に喜びます。

例えば、畑に行ってキュウリやトマトも採ってきて、包丁で切って食べた。そういう経験を今までしたことがなかった。そうした体験がすごく新鮮なわけですよ。それを家に帰ってやるわけです。私たちの年代からすると、それは何でもないことのように思いますが、今の子どもにとっては非常に新鮮な体験なのです。



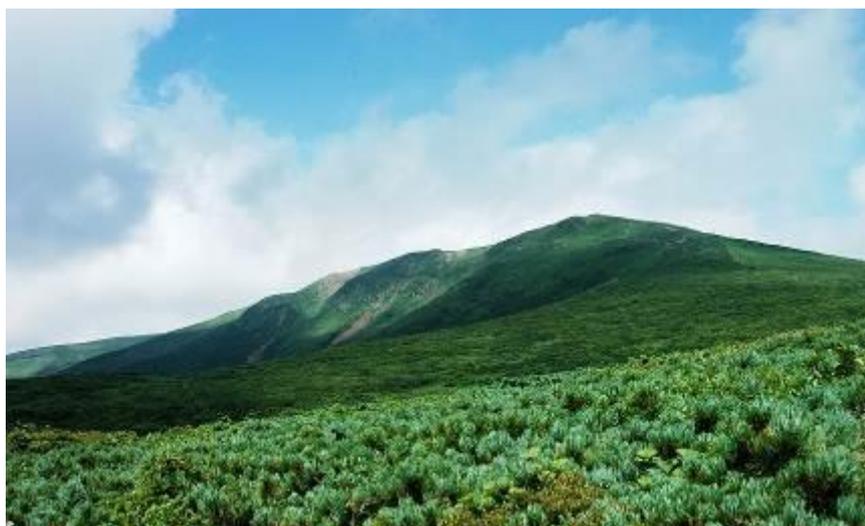
食事をしながら、互いのコミュニケーションを図る（ルーデンス農場）

私が、かつてスキー学校の教師をしていたときに、利口で、少しツンツンしている女の子がいてね。率先して頑張るほどではないが、要所ではうまく立ち振る舞う。皆から少し距離をおいた感じがありました。ところが、バーベキューの跡片付けのときに、こびり付いた鉄板を一生懸命磨いているのですよ。性格なのでしょうね。そこで、そのことを褒めてあげたら、他の鉄板も一生懸命に磨いてくれた。それで皆に感謝され、認められたのです。そのことをきっかけにして、積極的な態度に変わったのを見たことがあります。

自然体験活動は、子どものいいところ発見する機会でもあると思っています。そういう素直な子どもの心を発見することが喜びですね。

4. くりこま高原自然学校の取組

——自然環境と共生する持続可能な社会づくりを目指して——



ハイマツと高山植物に覆われた栗駒山の全景



話し手：くりこま高原自然学校
校長 佐々木豊志 氏

【プログラムの概要】

- 名 称 くりこま高原パイオニアキャンプ 2007
平成 19 年度子どもゆめ基金助成事業
- 主 催 NPO 法人くりこま高原・地球の暮らし
と自然教育研究所
- 日 程 平成 19 年 7 月 30 日(月)～8 月 12 日(日)
13 泊 14 日
- 場 所 宮城県栗原市栗駒沼倉耕英中 57-1
- 施 設 くりこま高原自然学校
- 対 象 小学 4 年生～中学 3 年生、11 名
- 参加費 65,000 円 (宿泊・食事、指導料、保険料)
ねらい 「生きる力」の養成——自己決定・自己
責任能力、創造性の能力、命や資源を大
切にする能力、基本的な生活能力、自発
的行為の養成。
(プログラム事例・206 頁参照)

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——佐々木さんが、自然学校の設立を思い立たれたキッカケは何ですか

佐々木 私は盛岡で生まれ育ちました。中学校に入学した当時、この中学校は大変に荒れていまして、4人の先生を投入して何とか立て直しを図ろうと取り組んでいました。その先生たちが取り組んだのは、教室ではどうにもならないということで、岩手山に新入生270人全員を登山させるということから始まり、卒業するまでの3年間で様々な体験をしました。サイクリングや冬山スキー、稲刈りなどを体験しました。それを指導した熱心な先生がいて、この先生から強烈な印象を受け「教員になろう」と心に決めました。

そういうことで筑波大学に入って野外活動を専攻し、冒険教育という分野を学びました。しかし、在学中に「教員には向かない」と思って教員になることあきらめました。その後、山岳写真家を目指してネパールに渡ったこともありましたが、あるテレビ局が主催する野外教育事業に関ることになりました。しかし、企業の中でやる野外活動には限界があることに気付き、『やはり自分で作らなければ駄目だ』と思うようになりました。

そうしたことがあって15年勤めたテレビ局を辞め、「全国に100の自然学校を作ろう」というネットワーク活動に加わり、この栗駒高原に1995年自力で建物を建て、翌年から自然学校を始めました。当初は、『子どもたちに自然体験を提供して、子どもたちの発育、発達に貢献しよう』という気持ちでしたが、それで生活するということが如何に大変かということが分かってきました。

——不登校、ひきこもりを対象とした長期寄宿を始められた動機は何ですか

佐々木 1996年、中央教育審議会が「ゆとり」を重視した学習指導要領を導入しました。これを受けて、99年に完全学校週5日制が実施され、総合的な学習の時間が導入されました。21世紀を目の前にして日本の教育の在り方に関する方針が示され、この頃から「生きる力」という言葉が使われ始めました。こうして、生きる力を育むための社会体験、生活体験、自然体験などのさまざまな体験活動が注目され始めました。その一環として、「長期の自然体験をやりましょう」という文部科学省の方針が出まして、2週間以上のキャンプとか、長期自然体験村という活動を全国で展開するという方向が打ち出されました。当時、50箇所ぐらいあったと思いますが、それに応募することにしたのです。

ちょうどそのとき、中学2年生の女の子を持つある母親から、『娘が家にひきこもってどうしても学校に行かない。このキャンプに参加すれば、これをきっかけにして何か変わるのではないか』という相談を受けました。私としては、『母親はそう言っているけれども、本人がその気になるだろうか』という疑念がありました。ところが、当日になって母親に連れられてその子がやって来たのです。

この長期キャンプは2週間の行程でして、小学校高学年から中学生まで20人が全国から参加していました。前半は人間関係づくりやチームづくりを行い、後半は冒険キャンプをします。しかも冒険キャンプでは、山に入り込んだらしばらくは出てこないのです。ちょうど、玄倉川の事故（99年8月14日、神奈川県山北町の玄倉川の中州でキャンプし

ていた子どもたちが取り残され14名が行方不明になった事故)があったときです。あの時、私たちも栗駒山に入ってキャンプを張っていたのです。この子は、長い間引きこもっていたために体力がなく、最初に疲れ果ててしまいました。しかし、グループの仲間がその子をケアしてくれたのです。そういうことで、何とか3泊4日の冒険キャンプを無事に終え下山することができました。

キャンプの振りかえりカードに、『もう2度とこんな山登りはしたくない。でも、今回のキャンプの仲間とだったら、もう一度チャレンジしてもいい』と書かれていました。彼女としては本当につらい体験だったのです。学校の同じ年代の子とはもう関わりたくないという不信感を抱いていたのだけれども、キャンプで過ごした子どもたちは自分を認めてくれた。これが、彼女にとって大きな変化だったのです。そういうことで、2学期からは学校に通い始めたのですが、やはり3週間ぐらいして『学校に行けなくなった』という母親からの連絡がありました。自分は変わろうとしても、学校の環境が変わらなかったのです。そのとき、キャンプの仲間が手紙をくれたり、電話をくれたりして励ましてくれた。そうした励ましを支えにして、高校に行くという目標を立て、保健室登校をしながら高校受験に向けて頑張ったのです。その後、高校に通うようになってからは、何の問題もないということでした。

そこで、こういう悩みを持つ子がいるのであれば、『夏休みだけではなくて1年を通して面倒を見てもいいのではないか』と思い立ちました。翌年、社会福祉医療機構に「不登校、ひきこもりと長期自然体験活動」というキーワードで助成申請しました。不登校児童に関する情報がないので、仙台のフリースクールの方とか、東北大学の心理学の先生とか、仙台のチャイルドライン(子ども SOS)の方とかに委員になってもらって、「我々としては何ができるか」ということを検討しました。

その結果、「長期の寄宿でやるフリースクールが出来るのではないか」という結論になったのです。それで始まったのが、「耕英寮(こうえいりょう)」です。そういうことで1年目は助成金の支援を受け、2年目からは自立してやることにしました。最初の頃は、1人、2人ということで事業的には全く話にならない状態でした。そうするうちに、ここに住みながら地元の学校に通いたいという子どもが出てきました。最初は、不登校の子を預かる寄宿で始まったのですが、途中から「山村留学」を並行して始めることになったのです。それをやっているうちに、今度は大人が入ってきたのです。20代、30代の人とか、中には43歳という人もいました。学校に行けなくなった先生とか、公務員とか、人間関係がうまくとれない会社員とか、そういう人がやってきました。

——「若者自立塾」では、どのような活動をしていますか

佐々木 2003年12月、青少年育成推進本部がまとめた「青少年育成施策大綱」が閣議決定されました。それは、『社会が変化する中で、青少年の非行、不登校、ひきこもり、虐待などさまざまな問題が深刻化し、新たな問題として若者の社会的自立の遅れを生じさせ

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

ている。こうした問題は、個人の問題としてとらえるのではなく、社会がきっちりとらえて全体として解決すべきだ』としています。その一環として、05年度に厚生労働省から「若者自立塾創出推進事業」という施策が打ち出されました。

この施策を調べているうちに、私たちがこれまでにやってきたノウハウが使えないだろうか、と思いました。そこで、06年度の厚生労働省委託実施事業に手を挙げ「若者自立塾」を始めたのです。若者自立塾は、相当期間、教育訓練を受けず、就労することができない若年者が対象として、合宿形式による集団生活の中で生活訓練、労働体験などを通じて、働くことについての自信と意欲を身につけ就労へとつなげることを目的とするものです。全国に25箇所ありますが、どちらかというとも都会でやっているものが多いのです。

私どもの若者自立塾は、中山間地域の自然の中でさまざまな悩みを抱えている子どもや若者を支援する活動をしています。ここでは、生活体験（＝暮らし）と自然体験（＝冒険体験）を通じて、自らが持続可能な生き方を創造するとともに、就労に向けて一歩踏み出す勇気を育むことを目指しています。日常の生活体験、これを「ケの世界」と呼んでいますが、ここでは食事、洗濯、散歩、薪割りなどを通じて規則正しい生活習慣を取り戻し、健全な心身をまず整えます。次に、非日常の自然体験、これを「ハレの世界」と呼んでいますが、ここではキャンプ、カヌー、トレッキング、スキー、乗馬など自然の中で、冒険的な体験を通じて勇気ある強い心身を鍛えます。



カヌー体験は、水に触れ、風を感じ、自然と一体になる。自分の力で漕ぐ達成感、仲間との協力や一体感が生まれる。また、いつもと違う視線から見ることによって環境問題の重要性に気づく。（北上川）

——自然体験の教育的な意義についてどう考えますか

佐々木 教育の世界から出た言葉ではありませんが、学びの対象を「知」というもので考えるのであれば、この「知」には2種類の「知」があるとされています。一つは形式

知（けいしきち）と言われるもので、明文化、図表化、数式化などによって説明または表現できる知識概念です。この形式知を学ぶ方法が主に概念学習法と言われる学びの方法です。例えば、教科書、マニュアルなどを使って学ぶ、覚える、いわゆるインプットする学習方法です。これに対してもう一つは暗黙知（あんもくち）と言われる知識概念です。これは、一人ひとりの感覚的に身につけている知識で、経験や感覚的なものに基づき、言葉などの表現が難しい知識概念です。この暗黙知は体験を通して学ぶ、体験学習法でしか学べない知識です。例えば、コミュニケーション能力などは暗黙知の領域です。コミュニケーション能力は、教科書を読むだけでは身につけません。いろんな場面で、いろんな人と、いろんな話題を実際に体験してはじめて身につく能力です。自分が持っている形式知をどのように使うか、いわゆるアウトプットすることです。このアウトプットすること（＝知恵）を学ぶのが体験学習法なのです。

教育的にみると自然体験というのは、体験を通して形式知として確認できることがありますが、メインは暗黙知の方です。

ですから、この自然学校では、まずコミュニケーション能力を体験的に会得する暗黙知を重視しています。そこで、いろんな場面でいろんな人といろんな話題で話をします。「うまく伝わらない」、「相手の言うことが理解できない」、あるいは対立することもあります。そうしたことを経験しながらコミュニケーション能力をすこしずつ構築していきます。この自然学校での体験学習法というのはそういうことを学ぶ場です。

——自然体験の精神的な効果のついてはどう考えますか

佐々木 「セラピー」という言葉は、治療といった意味があり専門的な医療分野に属します。そういう意味で、自然体験（野外教育）活動で軽々しくセラピーという言葉は使えませんが、私のこれまでの経験からすると、自閉症の子どもを自然の中に連れていくと感覚的に改善するケースがみられます。そういう場面をみていると、自然環境は心を「癒す」だけではなく、心を「治療」する効果があるのではないかと思います。

いままでよく分からなかったのですが、ここに来る子どもの中には、教育では限界がある子どもがいます。教育以前に、心理的なケアとか、カウンセリングとか、あるいは精神科の治療が必要ではないかと思われる子どもがいます。そうした意味で、専門の方と手を組んでいけば、そうした子どもをケアできるのではないかと、私どもの自然学校の役割の一つがそこにあるのではないかと、そういうふうに思っています。

来年2月、国立赤城青少年交流の家で、「自立支援者のための研究協議会」が開催されます。そこにはアウトドアをやっている人とか、野外教育をやっている人とか、心理学の専門家とか、精神科の医者とか、これまで接点がなかった人たちが手を組んで、精神的なケアが必要な子どもを受け入れることについての話し合いをします。その中に、森林を使うとか、畑をやるとか、家畜を育てるとか、あるいは乗馬などをトータルして活用できないだろうか、と思っています。やはり、私どもの自然学校で欠落しているのは、心理学と

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

か、あるいは精神医療の分野です。いま、こういった専門の人たちと何とか連携できないだろうかと模索しているところです。

問題をもっている子どもは、カウンセリングを受け、あるいは病院に連れていっていますが、お医者さんも限界を感じています。都会の病院での月に1回、1時間程度の診療時間だけで診断して治療することには限界があります。やはり、こうした自然のフィールドの中を活用すればいい結果がでるのではないかと考えている医者もいます。最近、森林セラピーという言葉が出てきましたが、こういう自然のフィールドを活用するためにも、野外活動の人とか、お医者さんとか、心理カウンセラーの人たちが、もっと手を結んで考えなければいけないと思います



馬と一緒にいると、心が癒され、自分の気持ちが開く。さらに、馬の世話をすることで、自立心や責任感を培う。（くりこま高原自然学校）

——自然体験は、どういう年齢から始めたらいいと思いますか

佐々木 ドイツにはルドルフ・シュタイナーという思想家が唱える「シュタイナー教育」に基づいて独自の教育を行う考え方があります。シュタイナーによると、人間の人格形成はおよそ21歳までに完成され、この年代までの刺激とか、経験とかが人格形成に大きく影響すると言っています。この年代を過ぎると、同じ経験をしてもなかなか入っていきません。だから、この年代を超える前にしっかりと体験をさせなさいと言っています。そのため、それぞれの時期にやるべき教育課題を示しています。

シュタイナーによると、0歳から7歳までの教育の課題は、とにかく「身体の諸機能が十分に健全に働くようにしてやる」と言っています。子どもは、きれいな気持ちはきれいなものを見ることによって身につけ、美味しさは美味しいものを食べて味覚が発達す

るように、すべての感覚を総動員して、まわりのすべてを模倣します。だから、模倣にふさわしい、子どもに吸収されてよいものを身の回りに置くようにします。この時期には周囲の大人は模倣されてよい存在でなければなりません。この時期の子どもに「自分で考えなさい」といっても無理なことです。

この時期に十分遊ばせないで、無理やり習い事をさせたら、後になってトラブルが起こるわけですね。この時期に育つべき意志力や行動力が充分育たないで、どこか意志力とか行動力が弱い人間になってしまう。この意志力や行動力がなければ、本当の思考力というものがない。この時期は、親とのコミュニケーション、特に母親とのコミュニケーションが大事です。この時期にいい体験をしているかどうかは人格形成に大きく影響してきます。



森の中で、子どもが持っている力を十分に発揮させ、生きる力を育てる。(くりこま高原自然学校)

最近の子どもたちを見ていると、幼児期にいい体験をしていない子どもが多いですね。そこで、自然学校では幼児を対象とした「森のようちえん」を始めています。「森のようちえん」では、3歳までは母親が抱っこして森の中に入り、会話をいっぱいします。感情はこの時期に発達しますから、周りにいる大人が表現することがとても大事なのです。4歳ぐらいからは木登りなどをします。そうすることによって、次のステップにつながっていきます。

一昨年は、全国に呼びかけて、全国交流フォーラムをここで開催しました。このときは80人ぐらいが集まりました。昨年は、北海道で開催しまして130人ぐらい集まりました。今年は3回目となりますが、この12月に東京都代々木で3日間にわたり開催することになっています。

——体験活動は、どのような教育効果があると思いますか

佐々木 シュタイナーによると、8歳から14歳までの教育の課題は、感情体験として「感じとらせるように学ばせる」ようにすると言っています。この教育は、将来、豊かな感情を持つことにつながっていきます。ここでやっている2週間のパイオニアキャンプは、

まさにこうした感情体験で、喜んだり、怒ったり、悲しんだり、楽しんだりしながら、豊かな感情を育てます。

感情体験をしないと、大人になって感情の乏しい、人間味の乏しい人間になってしまいます。体験すればするほど概念化する力とか、想像する力が養われるのです。本を読んだとき、たくさん体験していると字面から何を言わんとすることがイメージ化できます。ところが感情体験が不足している子どもは、字面は読めるけれどもイメージ化ができないのです。体験をたくさんしている子どもは、先生の言葉をイメージ化して、自分のものとして理解できる。ところが体験不足の子どもは、先生の言葉は耳に入るけれども全部すり抜けてしまうのです。

また、この時期の大人は権威的でなければなりません。この時期の子どもにとっては、権威は学校の先生です。そういう全面的に頼りになる大きな権威を体験しないと、将来において本当の自由に達することができない。権威に対する欲求不満が残って、大人になってから外側の権威に盲従してしまいがちになります。

話しは少し外れますが、会津藩に日新館という藩校があります。そこには「什（じゅう）の掟」（会津藩における子弟教育の組織。藤原正彦の「国家の品格」で紹介され、学校でのいじめなどが社会問題化する中、教育関係者の注目を集めた）があつて最後の一節に「ならぬことはならぬものです」と書いてあります。例えば、「弱い者をいじめてはならない」ということは理屈ではありません。こうしたことは、この時期にきちんと教育しなければならないのです。ここに来ている不登校の子どもたちには、『お前たちのわがままを聞くために、親から預かっているのではない』と言っています。彼らは理詰めで、理屈ばかりこねてきますが、理屈ぬきに「駄目なものは駄目だ」とはっきりと言うようにしています。

——長期キャンプとしては、どういう期間がいいと思いますか

佐々木 ここでやっているパイオニアキャンプは、2週間の長期キャンプ生活で、小学4年生から中学生までを対象にしています。このキャンプでは、自分で考え、自分の力で物事をやっていける自立心のある子どもを目指します。いわば、「生きる力」を身につかせることがねらいです。こちらから何か指示を出してやらせるのではなく、自分で考え、自分で行動をする、そういう子どもを育てます。

例えば、滝つぼにダイビングするとき、何が危なくて、どう跳べば安全にダイビングできるか、そういうことを自身で考えさせます。もちろん、事前に滝つぼの中を調べたり、水温を測定したり、安全ロープを張ったり、危険箇所を点検したり、ライフジャケットを準備するなど主催者としての安全対策を講じてのことです。

滝つぼに連れて行くときに、最初に子どもたちに『学校のプールとこの滝つぼはどこが違うか』を考えさせます。子どもたち自身に、このフィールドをしっかりと観察させるのです。子どもたちに、「あっちは流れが早いとか」「深みがあるとか」「岩がごろごろしているとか」気が付いたことを一つひとつ挙げさせ、「どうしたら安全に遊ぶことができるか」

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

の意見を出させます。そこで、「向こうに行くのは止めよう」「ふざけるのは止めよう」「押ししたりするのは止めよう」「石を投げることは止めよう」というルールを自分たちで決めます。このとき、スタッフは一切口を出しません。

学校の行事だと、先生から「ここは駄目」「あそこは駄目」「こういうことはしてはいけない」といった禁止事項がたくさん出されます。子どもたちは、先生に言われたことを守ろうとするかもしれませんが、自分の行動を決めていくにはやはり自分で考えさせなければ守られるものではありません。



何が危ないか、どう跳べばいいかを自分で判断する。そして、勇気を出して滝つぼに飛び込む。(栗駒高原窓滝)

キャンプでは、知らない子どもがたくさん集まります。最初の頃はそれぞれが殻を被っていますが、3、4日も経つとだんだんと殻がはがれてきます。リーダーシップを最初に執るのは体の大きい子ども、声の大きい子どもですが、時間が経つにしたがって変わっていきます。最終的には、仲間から信頼される子どもがリーダーになっています。初期の段階は、「ここに誰がいるのかな」といった状態です。でも互いに話が始まって、意見がぶつかり本音がでて対立や混乱が起きる。それがキャンプの面白いところで、喧嘩や対立が始まります。その中で、こうした問題を解決するための仲間うちのルールづくりやお互いの役割分担が決まってきます。こうなるまでには2、3日はかかります。子ども同士が納得するまで、辛抱強く時間をかけます。ですから2、3日ぐらいの短期のキャンプでは疑似体験で終わってしまう。そういう意味では、やはり2週間ぐらいは必要だと思いますね。

——自然学校の運営はどうしていますか

佐々木 この自然学校における運営の基本的な考え方は、持続可能な開発です。97年にNHKのBS1で「エンデの遺言」という番組が放送されました。この番組を見たとき、これまで私が考えていたことと全く同じであることに驚きました。

エンデによると、21世紀のことを考えれば、お金の問題を考えなければ駄目だと言っています。要するに世の中の社会問題は、すべてもとをただせばお金の問題に立ち戻る。だから、お金の問題は、きっちりとやらないと駄目だと言っています。自然の摂理に従うと世の中の問題は自然に解決する。だから、お金は道具として使い分けるべきだと言っています。お金は、木の实のように自然界には潜在しない物で、人間が作った道具の一つです。カナヅチやノコギリと同じです。人間が作った道具というのは、その目的を達成するために作られたもので、正しく使えば幸せになるが、使い方を間違えると、目的外に使うと不幸になると警告しています。



廃材を利用して建てた「くりこま高原自然学校」の施設

私は、グローバルな社会は本物ではない、虚構の世界だと思っています。周辺の人、毎年のようにこの自然学校の施設が建てられていくのを見て不思議に思っているようですが、ここにはお金はありません。では、どうしてお金がないのに施設が運営できるのか。例えば、ここに釘が出ているとしますね。そのときどうするかと言いますと、普通はカナヅチ（＝グローバルなお金）を持ってきて打ち込みます。ところが、こうした環境ではグローバルなお金はゲットできませんから、私たちはここにある石（＝資源）を使うわけです。この資源を有効に使うことで施設を運営しているのです。その最たる資源が廃材の有

効利用です。以前は、建築業者が勝手に焼却していたのですが、今は環境問題があつて廃材処理するにはお金がかかります。建築業者には、ここでは廃材の再利用とか、薪ストーブを使っていることを知らせてありますので、電線などの金属とか、新建材とかを外して、ここまで運んでくれます。また、ガサガサと置くと不法投棄になりますから、ユニックできれいに積み上げると資源扱いになります。

建築材として再利用できる廃材は、建物や小屋の資材として使い、その他は薪にして燃料にしています。今、石油が高騰している中で、一円も使わないでエネルギーを調達しているわけです。また、廃材を運ぶ道がないときは、業者が砕石やコンクリート廃材をダンプカーで運んできて敷き込み、道を作っていきます。つまり、グローバルなお金を使わないで施設を整備しているのです。その他、食べ物の方は、家畜を育て、畑も作り、春は山菜採り、秋はキノコ採りにいきます。そういうものを織り込んでいくと、グローバルなお金がなくても結構運営ができます。

現代社会ではすべてを自分ですることは難しいですが、自分ができることを増やしていけば、それだけお金は必要としません。そうすれば、もっと資源を有効活用できるし、グローバルなお金に翻弄される生き方は無くなると思います。そのために、どれだけ自分ができる能力を高めることができるかです。それと、お金だけで物事をすべて済ませる社会ではなくて、人と人とがかかわりながら、いろいろなものを解決する社会を目指していくことが大切だと思います。

——今後、佐々木さんとしてはどういう体験活動を考えていますか

佐々木 奥州は、昔から馬と深い関わりをもった地域です。そこで、栗駒山周辺の歴史、文化、風土を資源として馬を活用したビジネスを考えています。

アメリカでは、馬を使ったビジネスが盛んで、馬はすごく身近な存在となっています。旅行先で馬に乗る人がたくさんいまして、馬を使ったツアー専門のビジネスが発達しています。アメリカ本土をはじめとしてカナダ、メキシコ、ブラジル、オセアニア、中央アジア、ヨーロッパ、アフリカなど世界各地の旅先で馬に乗りながら歴史、文化、自然を見る乗馬ツアーが人気です。10年ほど前、アメリカの乗馬ツアーの担当者が来日して、日本でも乗馬トレイルツアーができないだろうかと、九州や北海道を見て回ったのですが、なかなか条件に合うところがなかった。

これには3つの条件がありまして、これを栗駒高原で検証してもらいました。1つ目は、初心者でも外乗ができるトレーニングされた馬がいるかどうかです。日本の乗馬クラブの馬は、ほとんどが引退したアラブ系のサラブレッドで初心者は乗せられないのです。これらの馬は走るようにチューンナップされていて、自動車に例えればF1です。これでは日本の山道は走れませんし、ましてや初心者は危なくて乗れたものではありません。ところが、栗駒山麓に「岩手ウエスタン乗馬クラブ」という乗馬クラブがありまして、外乗りができる乗馬を育てている小野寺尠城さんという方がいます。アパルーサ、ペイントなど

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

いわゆるカーボーイやネイティブアメリカンが乗っているような馬を生産し、調教しています。乗馬ツアーの担当者は、日本にもこんな馬を育てているところがあるのかと大変驚いていました。

2つ目は、馬に乗って、その地域の歴史、文化、自然を見ることができるかどうかです。アメリカ人は歴史に関心があって京都、奈良、鎌倉などの観光スポットを訪れますが、栗駒山の東山麓にはかつて京都に匹敵する平泉や中尊寺があります。源義経の伝説もあります。また、黄金国ジパングの黄金はこの奥州から産出されました。さらに自然の面では、日本を代表する豊かなブナの原生林がたくさん残っています。

3つ目は、これらの地域をつなぐトレイルがあるかどうかです。そのため、歴史、文化がある平泉からブナの森が広がる栗駒山の山麓を廻るトレイルを繋いだらどうかと考えています。今のところ、岩手県と宮城県を跨ぐトレイルはありませんので、山麓の林道をつないで県境を越える「馬の専用トレイル」を作ったらどうかと考えています。このトレイルは、基本的には市民の力で維持、管理することにしたい。こうした諸条件が整えば、日本で初めての本格的な乗馬ツアーができるのではないかと考えています。

市当局には、「馬にこだわった町づくりをやりましょう」と呼びかけています。この栗駒地域は、馬にかかわる歴史やその名残がたくさんありますから、こうした地域資源を生かせればいい。勿論、くりこま高原自然学校としても、馬を使った自然体験プログラムを採り入れ、クリエイティブな生き方ができる人間づくりに貢献できればいいと考えています。

5. 森の発見・体験ミュージアム「ハローウッズ」の取組

——元気あふれる森を創造し、子どもを元気にする——



ハローウッズの建物施設（左下）とキャンプ場



話し手：ハローウッズ
森のプロデューサー
崎野隆一郎 氏

【プログラムの概要】

- 名 称 放置された森の沢お復元
主 催 (株)モビリティランド
ツインリンクもてぎ・ハローウッズ
日 程 平成19年6月30日(土)～7月1日(日)
1泊2日
場 所 栃木県芳賀郡茂木町桧山 120-1
施 設 ツインリンクもてぎ・ハローウッズ
対 象 中学生・大人 10名
参加費 8,500円（プログラム費、キャンプ道具一式、保険料）
ねらい 放置された棚田や沢を整備し、ホタルをはじめとする水生生物が棲める環境を整備することを通じて、里山の再生と環境に対する認識を深める。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——今朝、ハローウッズにお邪魔したとき、スタッフの方から「おはようございます」と元気な声を掛けられ、なんだか嬉しくなりました。崎野さんは、ハローウッズをどのように運営しようと考えていますか。

崎野 ありがとうございます。僕は、基本的には「子どもを元気にしよう」と考えています。そのためには、生き物たちの多様性を保てる元気な森でなければいけない。森に入ってみたくなる元気な森でなければ人は来てくれません。つまり森は魅力的でなければならぬ。そして、森に来た子どもたちがどんどん魅力的になっていく、そういうことができるといいなと思っています。それと森を元気にするためには、ハローウッズの森の特長を最大限に生かすこと。そして、何よりも本当に僕たちが「森を元気にしたい」という思い、気持ちを強く持ち続けることだと思っています。心を満たしてくれる森、ここにくるとほっとしたり、元気になったり、そういう生きるエネルギーに溢れる空間にしたいと思っています。



里山に囲まれたスーパースピードウェイ（ツインリンクもてぎ）

——ハローウッズは、どのような経緯で設立されたのですか。

崎野 今から 45 年ほど前のモータリゼーションの黎明期に本田技研工業が健全なモータースポーツを普及するため、三重県鈴鹿市に本格的な国際ロードレース場「鈴鹿サーキット」^(注) を設立しました。さらに、成熟したモータリゼーションの時代には家族を含め安

^(注) 1962 年、日本のモータースポーツの健全な普及を図るため三重県鈴鹿市に設立された日本初の本格国際ロードコース。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

全にモータースポーツを楽しめる施設が東日本にも必要だろうということで、必要な土地がまとめられる栃木県茂木町に「ツインリンクもてぎ」^(註)を設立しました。これが、1997年のことですが、それから3年後の2000年にハローウッズがオープンしました。

ツインリンクもてぎの敷地面積は640畧あります。このうち、3分の1の220畧がレース場、コレクションホール、ホテル用地などとして使われましたが、残り3分の2の420畧の里山はそのまま残されました。この里山はコラナなどの薪炭林とスギ、ヒノキの人工林ですが、この里山が人に役立つような活用の途がないかということでハローウッズが設立されました。

当初は、鈴鹿サーキットと同じように遊園地もつくる話だったようですが、時代はもう遊園地ではないということになった。そこで、里山の自然の豊かさが子どもたちの元気を取り戻すことにつながっていくことがいいのではないかということで1998年に方向転換しました。その時、僕が呼ばれて、翌年から調査、設計に取りかかり、2000年夏にオープンしました。「ハローウッズ」という名称は、「ようこそ、森へ」という意味です。



森の生態系をわかりやすく解説するキャストトークショー

——ハローウッズの運営主体は、どこになりますか。

崎野 ハローウッズのすべての施設は本田技研工業の所有ですが、実際の企画、運営はハローウッズが担当しています。オープン当時、本田技研工業としては自然体験活動は始

^(註) 1997年、アメリカン・モータースポーツという新たなモビリティ文化の普及を目的に栃木県茂木町に設立された我が国唯一のスーパースピードウェイを擁する参加体験型の総合レジャー施設。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

めての試みでもあり、本田技研工業から直接委託を受けたハローウッズが運営主体でした。昨年6月、本田技研工業の子会社である鈴鹿サーキットランド、多摩テック、ツインもてぎの3つを合わせてモビリティランド^(注)という会社が設立され、現在は株式会社モビリティランド・ツインリンクもてぎ・ハローウッズとなっています。

——ハローウッズの主な活動プログラムにはどのようなものがありますか。

崎野 大きく分けて毎日開催プログラムと期間限定プログラムがあります。毎日開催プログラムでは、森の中を案内するガイドウォークやクラフトが主です。ガイドウォークは、キャスト（森の案内人）が森の中を案内して歩くプログラムです。おおよそ2時間コースで、短いものとしては30分ぐらいのものがあります。

キャストトークショーというプログラムもあります。このプログラムは、身近な自然に目を向けてもらい、そこから環境保全に関心を持ってもらおうというコンセプトで、地球温暖化の原因となっている二酸化炭素（CO₂）の話とか、なぜスギやヒノキの間伐が必要なのかとか、コナラやクヌギの萌芽更新の話といったものを現場でわかりやすく説明します。その中で、木を切ることは悪いことではなく、里山の環境を守るためには不可欠な作業であることを説明しています。

期間限定プログラムは、森づくり、クッキング、キャンプ、ものづくりなどです。森づくりは主に間伐などの里山の手入れを行っていますが、今年のテーマは「放置された森の沢の復元」というワークショップを開催しています。



灌木を伐採すると20数年まえに放置された棚田が現れた。

^(注) 鈴鹿サーキット、多摩テックとツインリンクもてぎが培ってきたノウハウを結集し、より豊かなモビリティ文化を創造することを目指す。喜び、楽しさ、そして感動を広く社会に提供し続ける企業体。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

また、学校やいろんな団体を対象とした里山体験プログラムというものをやっています。このプログラムでは、主に林床の刈り払いとか落葉掻き、棚田体験などを行っています。



東京からきた親子連れが棚田の稲の草取り作業に取り組む

キャンププログラムでは、1泊2日、2泊3日、3泊4日、1週間、最も長いものでは1ヶ月キャンプというのがあります。これは、小学生の高学年、中学生が対象です。そのほか家族向けのプログラムもあります。

何の施設もない森の中でやるキャンプを「冒険キャンプ」と呼んでいます。家族を対象とした冒険ファミリーキャンプは人気があります。このキャンプでは、火熾しから始めて、炊飯、ドラム缶風呂などすべて自分たちでやります。子どもを対象とした1週間キャンプも、こうした冒険キャンプ型のプログラムです。



何もない森の中での冒険キャンプ。みんなで協力して火熾し、ドラム缶風呂、焚き火を使った料理に挑戦する。

(写真：ハローウッズ HP)

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

最も長い1ヶ月キャンプはこれまで5回ほどやりました。1ヶ月の間には、原始キャンプといったものがあり、テントサイトのない森の中で泊まり、森の中で生活するキャンプです。火が熾せなかったらご飯も炊けない。中には、1日とか、2日とかご飯を食べられない子どももいます。そういう子どもは、森の中で泣いています。与えられたスケジュールをこなしていくのではなく、自分で乗り越えていかない限りは絶対に先には進まない。自分が生きていく上での知恵や技能を身に付けない限りは、次のステップには進めないことを体験するためです。ちょっと理不尽に見えるかも知れませんがね。

——これまで体験活動を行っていて、何か気付かれたことがありますか。

崎野 そうですね。昨年度は日帰りのお客さんを含めて7万7千人の方がハローウッズを訪れました。そのうち、8割は3歳から9歳までの子どもと一緒に親子です。年代的には子育て世代の30～40代といったところでしょうか。この世代がハローウッズの主なお客さんです。中でも、間伐材や木の枝などを使ったクラフトに人気があり、中には子どもをそっちのけで親の方が熱くなってしまう方もいます。また、お爺ちゃん、お婆ちゃんが孫と一緒にクラフトに熱中しているほほえましい光景も見かけますね。

なぜクラフトに熱中するかと言えば、人間は誰でも想像する力と創造する力を持っています。この力を目覚めさせるきっかけさえあれば、熱中するということでしょう。



子どもは木の枝を使った昆虫づくりに熱中する（イメージ）

1ヶ月キャンプをやり終えた子どもを見ていると、行動や意識がすごく変わっていることが分かります。ナイフを持たせると、ナイフで魚を3枚に下ろせるようになる。それから、火を熾せる、飯盒でご飯を炊けるようになる、そうした生きていくための基本的な行為ができるようになっていきます。自分に自信が持てるようになってきているのだと思います。

森の中には給水施設がありませんから、毎日10キロの水タンクを運ばなければなりま

せん。かつては、この日本でも水汲みは子どもの仕事でした。インドとか、アフリカに行く子どもが水汲みをやっています。今、日本では蛇口をひねれば、どこでも飲める水が出てきますが、ここでは水汲みあえてやらせています。現代の便利社会では体験できないことをやっています。こうした体験活動を通じて、生きる喜びとか、いままで気付いていなかった自分を発見するとか、そういうことをねらいとしています。

しかしながら、家に帰るとまた元に戻ってしまう。その原因を突き詰めていくと、親を何とかしない限りは子どもの意識は変わらないという気がします。家での生活環境とか、親の意識が変わらない限りは子どもの意識は変わらない。そこで、大人のキャンプを始めました。もう4年になりますが、森の中でキャンプをして森の遊びを体験してもらっています。自然の中で遊ぶことが如何に楽しいかということを親が気付けば、子どもの意識や生き方に影響を与えたいと思いますからね。

それと、子どもは母親と接する時間が長いので、大人キャンプのバリエーションとして女性だけのキャンプも考えたいですね。

——どこに行っても体験活動には、女の子が多く、男の子の参加が少ない。こうした状況を崎野さんはどのようにみていますか。



女の子は何にでも興味を示し、自分でやろうとする。一方、男の子は少し身を引いているようにも見える。

(イメージ)

崎野 僕は長いこと野外活動をやっていますが、どこに行っても男の子が女の子よりひ弱く感じます。同年齢で比べてみると男の子の方が幼く感じます。女の子は何にでも興味を示し、自分でやろうと手を出します。これに対して、男の子は少し身を引いている感じがしますね。それはなぜかということ「ずーっと」考えてきました。ある人と話をしている「はっと」気付いたことがあります。それは、女の子は幼児のころから「ままごと」遊びをしています。女の子の遊びは、実際の生活や親の仕草を真似た遊びになっています。野外活動において女の子が積極的なのは、こうした活動は家庭生活の延長でもある性でしょう。

ところが、劇的に変わったことがあります。それは、かつて野外で遊んでいた男の子の遊び方です。かつては、野山や田んぼを自由に駆け回り、虫を追い、魚を捕り、自然の中で奔放に遊んでいた。都会に住む子どもも同じことをやっていた。ところが、そうした遊びのフィール

ドが周囲から次第に姿を消していった。それに代わって、屋内で座り込んでゲーム機のまえでピコピコやっている。野原を駆け、河原を走り、土手を飛び越えて、狩猟本能をむき出していた男の子が全くいなくなった。こういう環境や生活様式の変化が男の子の遊びに影響しているのではないか。振り返ると女の子ばかりが着いてくる、男の子はどこへ行ったのだろうかという感じですね。

——森の中を歩いている皆さんを見ていると、崎野さんが一番楽しそうでした。プログラムを作るに当たってどういう点に配慮されていますか。

崎野 子どもたちが森に来てくれることがうれしく、楽しいからでしょうし、またそれが子どもたちに伝わるのでしょね。でないともどもは語りかけてくれません。子どもはすごい直観力を持っています。この人と話ができるかできないかということ、その行動、姿を見て、直感的に判断してしまふ。ここは学校ではなく、まして僕らは学校の先生ではありませんから、何かを教えてやるとか、教育してやるということは一切しません。僕らが楽しくないプログラムは提供しないようにしています。このことは、スタッフにやかましく言っています。

——森の中は危険が潜んでいる場所ですが、安全面ではどう対処されていますか。



あえて手摺を設けていない遊歩道
(ハローウッズの森)

崎野 基本的には、危ないことは身をもって体験させるという姿勢です。そういう意味で特別に安全施設は設けていません。怖いことでもあえてさせます。ここのフィールドを見ていただくと分かりますが、手摺はほとんどありません。

よく「どうして手摺を付けないのか」といわれます。危ないところに手摺を付けると、子どもはわざと寄り掛かってしまふ。逆の発想で、怖いところは自然に自分で注意するものです。こういう危険予知の体験をさせることも、重要なテーマだと考えています。怖いということ自分で判断し、それを避ける感覚を育てることが大切です。夜、ライトを付けないで歩いたりしますけれど、今まで転落した子どもはいません。もし、手摺がポキンと折れたら非常に危険です。森の中にはいろんな危険が潜んでいますけれども、一番大切なことは、失敗したこと、怪我をしたこと、

転んだことをキチンと伝える。子どもたちに「どういうことをして怪我をしたとか」を話しますと、「あ、そういうことはしたくない」というふう気持ちになりますからね。

——ハローウッズにおける活動プログラムの収支バランスはどうなっていますか。

崎野 正直な話、収支はバランスしていません。キャンプなどのプログラムについては、原価計算をしていますが、人件費を含めたすべての経費を参加費で賄うことはちょっと難しいですね。そこで、コストが掛けないで仕組みを作ろうということを考えています。結局は、色々なプログラムを合算して収支バランスをとることでしょうか。



「ハローウッズの森を最大限に生かすデザイン力が大切だ」と説明する崎野プロデューサー

それと、森の中にある資源で付加価値の高いものを生み出す。それはデザイン力だと思うのですね。いろんな木を使って玩具をつくるなど試行錯誤しています。その中でヒット商品が生み出せないか。ヒット商品を生めるような企画力、そういうものの中でしか、こういう施設はペイしないだろうと思いますね。すべてをペイできる施設にしたいのですが、それはちょっと現実的には無理だと思います。そういう中で、あの手この手を考えなければならぬ。

そのほかに、団体にどうアプローチしていくのかということも考えています。これはまだアイデアの域を出ていませんので詳しい話はできませんが、今までになかった発想で大人数を収容できる森のキャンプができないかと考えています。

——こうした活動を継続していくためには、経営的な感覚が必要ということですね。

崎野 そうです。いろんなところとコラボして経費が掛からないようにしていくというのも1つの方法だと思います。手を抜いていくとお客さんが来なくなりますからね。

——広大な420[㍊]の里山で活動する場合、地元とのかかわり、協力というものが必要になるとは思います。

崎野 基本的には、地域の方々の要望や依頼に対してはいろんな形で応えるようにしています。森林組合にはこちらから積極的に足を運んで、ことあるごとに話かけていくことが大切です。我々が謙虚に地元の人に声をかけて、こういうことをさせていただきますと、提案しています。そういうことを通じて地元の人たちとのコミュニケーションを図っています。

一方で、地域の人たちから何か教えてほしいという要請があれば出かけていきますし、会合があれば必ず出席するようにしています。

現在、ハローウッズでは講師の派遣をやっています。今の季節であれば、あちこちのホテルの鑑賞会への講師派遣ですね。どうしたらトンボやホテルを増やせるとか、我々が持っているノウハウを提供しています。今、隣の町の人とも付き合い始めて、お呼ばれがあれば些細なことでも出かけています。そういう積み重ねが肝心だと思っていますね。いつでも地元の人に声掛けをしながら、『こういうことを考えているが、どうでしょうか』という謙虚な姿勢が大切ではないかと思っています。



地元の森林組合の方の指導や協力を得て森づくりをすすめる

——最後に、この里山をどういう方向に整備していこうと考えていますか。

崎野 この森を3つのタイプに分けて整備しようと考えています。一つは、先人たちが植えてくれたスギ、ヒノキの森林です。この森林をきちんと手入れをして、次の世代の人たちが施設をつくるときに活用したい。

それから、コナラ、クヌギを主体としたかつての薪炭林は、適宜に間伐を繰り返しながら大きな「ドングリの森」に育てていきたい。いずれにしても間伐などの人手を加えながら、元気な森を育ていきたい。そうすれば、その過程で二酸化炭素（CO₂）を有効に吸収することにも貢献します。そこで科学的なデータを取りながら森林の活性化をしていきたいと考えています。そうした森林の再生、活性化を図っていく中で、子どもたちが元気に育っていく場にすることが願いです。

もう1つは、この地域に潜在的にあったシラカシを主体とした常緑照葉樹の極相林を造成したいと考えています。これは本田技研工業が30年ほど前から工場緑化の方法として取り入れている「ふるさとの森」の発想と同じですが、この極相林でサーキット場を取り囲みマシンの爆音を緩和させることが夢です。この3つの森づくりを子どもたちや地域の方々と一緒にコラボして作りあげていきたいと思っています。

——いわば、森づくりを通じた自然と人間の共生、共栄ということですね。ありがとうございました。

6. やま（森林）づくり塾の取組

—— 子どもたちに学んでもらえる山づくり——



世田谷区と縁組協定を結んだ川場村の夜明け



話し手：東京農業大学
林政学研究室
講師 関岡東生氏

——(株)世田谷川場ふるさと公社が実施している「森の学校」は、どのような経緯から設立されたのですか。

関岡 1981（昭和 56）年に東京都の世田谷区と群馬県の川場村が、「区民健康村相互協力に関する協定」を締結しました。これを私たちは、通称、「縁組協定」と呼んでいます。防災の面とか、あるいは市民生活の面、教育の面など、およそ行政にかかわるすべての面で協力体制を執っていこうということです。一般にいう姉妹都市は部分的な交流に止まりますが、この縁組協定は二つの行政団体が全面的な交流をしていこうという協定なのです。ですから、通常の姉妹都市交流よりももっと深い縁で結ばれた交流といえます。

そういう中で、農山村地域である川場村としては、世田谷区に対してどのようなサービスの提供ができる

のだろうか、川場村としての売りは一体何なのだろうか。そこで考え出されたのが、川場村の豊かな自然を活用した活動を基本にして進めようということでした。

川場村の基幹産業が林業ということもあって、森林を活用した交流事業を展開していこうということで、この事業が始まりました。それが、いまから 25 年前のことです。当初は、まず入れ物（施設）を作り、だんだんと中味をいれる方法で進めてきました。川場村は他の農山村と同じように過疎に悩んでいた村でしたから、都市住民の大きなパワーを活用して森林の整備を進めることができないものだろうか、整備をすること自体が都市住民の魅力あるプランになるのではないかと、そういうふうに考えたのです。

——世田谷区と川場村の交流は、具体的にはどのように進められたのですか

関岡 山林所有者の理解というものは、そう一朝一夕に得られるものではありません。そこで、モデルケースとして当時の東京農業大学農学部林学科の学生が森林ボランティアという形で、縁組協定の開始直後から川場村の森林に入りました。その森林ボランティア活動がちょうど 10 年続きました。最初は、「大学生が山に入っても山が荒れるだけだ」、「学生が夜中に騒いで牛の乳が出にくくなった」とか、いろいろ住民から苦情がきました。

このように最初の頃は、「都会の人間が山に入って何をするか分からない」、「安心して自分の山を任せられない」といった雰囲気があったのです。そういう中で、森林ボランティア活動を続けていくうちに、「都会の学生もなかなかやるではないか」という評価をもらえるまでになってきました。その変化を契機にして、縁組協定締結 10 周年を記念するという形で、世田谷区民を対象とした「友好の森事業」を立ち上げたのです。これは川場村の民有林 80ha を世田谷区と川場村が借り上げて「友好の森」に指定し、ここを活動フィールドとして世田谷区と川場村の住民の参加の下に山づくりが始まったのです。



友好も森の拠点施設「なかのビレジ」

——「友好の森事業」の具体的な活動は、どのようなものですか。

関岡 何のトレーニングもしていない人にいきなり山づくりができるものではありません。ただ山に入っても村の人に迷惑をかけるだけです。森林ボランティアをする前に、まずトレーニングの過程が必要だろうと考えました。そういうことがあって、森林ボランティア教室を開くことになり、それが友好の森事業を担うボランティア養成塾に発展していきました。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

この塾では、森林と書いて「やま」と呼び、「やま（森林）づくり塾」と名づけました。当初、やまづくり塾は、「体験教室」と「養成教室」の2本立てでスタートしました。体験教室では、まず川場村を味わってもらって川場村のファンになってくださいというコースです。養成教室では、年4回の森林ボランティア教室を通じて、森林づくりのための基礎的な技術を習得してもらうコースです。

現在、養成教室は年4回セットでの申し込みをしてもらい、四季折々の山の作業を通じて森林づくりの技術を習得してもらう活動を展開しています。この年4回の作業を習得した人が、はじめて森林づくりに参加できる資格が得られるという訳です。

この友好の森事業を展開していく上で、拠点施設とバックアップ体制が必要ということで、友好の森事業のサブ事業として「森の学校」と「森のむら」というのを2つの事業を立ち上げられました。森の学校事業では川場村の森の素晴らしさを知っていただくための学習展示施設、森のむら事業では養成教室を修了された方の活動拠点としての施設を建設しました。なお、事業運営については、森の学校と森のむらの事業施設は隣接していますので、川場村が行政の立場で中に入って綿密な連携を取りあいながら進めています。



やまづくり塾の拠点となる宿泊施設（友好の森）

この2つの事業を具体的に管理運営するために、縁組協定が取り交わされた1981年に、「(株)世田谷川場ふるさと公社」という第三セクターを設立し、この公社が管理運営を行っています。また、そういった中で専門家としてのアドバイスをして欲しいということで、私たちの東京農業大学のメンバーが専門分野のスタッフという立場で、この友好の森事業に関わっています。

——地元の協力体制として、どういう方々が中心になっていますか。

関岡 地元の協力体制のきっかけとしては、東京農業大学が行った10年間の森林ボランティア活動が大きな役割を果たしたと思っています。協力者としては、地元の森林組合員の方とか、友好の森の地権者の方とか、講師として協力していただいているベテランの林業経験者の方などです。そして、温かい村民の方々のバックアップです。

——今年度から、「こどもやまづくり教室」を始められましたが、このプログラムのねらいはどこにありますか。

関岡 これまで、「森の学校」の中に「自然教室」という子どもを対象とした森林体験活動プログラムを設け、小学校の4～6年生、中学生及び高校生を対象にここ10数年実施してきました。しかし、同じ体験活動を長年続けていくと、どうしてもマンネリ化します。

そうすると「慣れ」が大きな事故に繋がったり、何でもできるという自由さが活動目的をぼやかしているとか、そういう問題点がでてきました。このため、今年度（2006年度）から、従来の「自然教室」と呼んでいた森林体験活動を「こどもやまづくり教室」にリニューアルしました。これは単なる看板の書き換えではなくて、「子どもたちにもできることはやってもらう」、「子どもたちに学んでもらえる山づくりを伝えていきたい」というねらいからです。



下草刈り体験（森の学校・夏の自然教室）



川の生態観察（森の学校・夏の自然教室）

一般的にイメージされる森林体験活動は、重量物を扱ったり、傾斜地で活動したり、危険な刃物を扱ったりなど危険な体験活動とされています。こうした事情から、子どもを対象とした森林体験活動はどうしても敬遠されがちです。

私たちはこれまで試行錯誤を繰り返しながら、森林体験活動のなかで「子どもにできることがある」という確かな手応えをつかむことができてきました。そこで、森林づくりに特化した子どもの森林体験活動として、これまでの「自然教室」を「こどもやまづくり教室」にリニューアルし、スタートさせたのです。

この教室では、一般的にイメージされる森林体験活動をもう少し幅広く考えて、森林づくりの成果として川にきれいな水が流れていくとか、栄養を含んだ水が川に流れることで川の中にたくさんの生き物が棲むとか、その川の中で遊ぶ

ことを通じて川の豊かさを感じとるといった活動に範囲を広げています。

そういう意味で、「こどもやまづくり教室」という名称を掲げていても、川のプログラ

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

ムがあり、また地域の人がどうやって山をつくってきたのか、あるいは森林を守ってきたのか、というプログラムも織り込んでいます。日本の森林・林業はすべて農家の人たちの手によって営々と培われてきました。そこで、子どもたちが実際に農家へ出かけていって、農家の暮らしを体験したり、お年寄りの方に農家生活について聞き書きをしています。そういう意味で、「こどもやまづくり教室」は、山づくりをテーマにした幅広い体験活動プログラムと位置づけることができていると思っています。



オリエンテーション（森の学校・夏の自然教室）

——「こどもやまづくり教室」は、どのような実施体制で行っていますか。

関岡 「こどもやまづくり教室」の実施主体は、建前としては世田谷区と川場村の両行政が行っています。したがって、企画運営の責任者は両行政団体にありますが、実際の管理運営はこの事業を受託している(株)世田谷川場ふるさと公社が行っています。一方、私たち東京農業大学は世田谷川場ふるさと公社からの協力を

を依頼された団体という位置づけになると思います。

「こどもやまづくり教室」は、8月（夏季）の4泊5日、それから12月（冬期）の2泊3日の年2回開催で構成しています。この教室はセットで申し込まなければならないというものではありませんが、期待としては夏と冬の両方に参加をしてほしいという気持ちがあります。また、そういう呼び掛けを実際やっています。

——「こどもやまづくり教室」の参加者は、どういう状況になっていますか。

関岡 「こどもやまづくり教室」は、今年から始めたプログラムですので年間を通じてやってみなければ分からない点もありますが、これまで夏季の参加者の7割が冬期も参加していますので、1年を通した長期自然体験活動といえます。また、4年生で初参加した子どもが6年生まで毎年参加するケースが4、5割近くあります。そういうことから推定して、今年から始めた「こどもやまづくり教室」でも同じような傾向になるのではないかと見ています。

参加者の対象は、最初の頃は、小学1年生から受け付けたこともありましたが、途中から小学4年生から6年生、そして中学生、高校生に絞っています。小学生はジュニアコース、中高生はシニアコースと呼んでいます。このうち、シニアコースは昨年「川場丸ごと滞在記」ということで大きくリニューアルしました。このコースは夏休み期間であれば



生活道路の雪かき体験（森の学校・冬の自然教室）

何時でも参加できるというプログラムで、主に地元の農家、林家の仕事を実際に手伝うという体験活動です。子ども向けにアレンジした教室ではなくて、実際に現場でプロの方の仕事を見習い、手伝うという体験を中心にしたプログラムです。

一方、これまでの自然教室のジュニアコースに相当するのが、「こどもやまづくり教室」でして、これまでと同じように世田谷区と

川場村の小学4年生から6年生を対象としています。この教室では、世田谷区と川場村の子どもたちの交流を図っていくというコンセプトを大切にしています。

参加人数は、これまでと同じように総勢70名を限度として募集をしていますが、年によって、抽選が必要なきもあれば、定員を割り込むこともあります。今年は、自然教室という名称を変えたこともあってか、若干定員を割り込んだ参加者数となりましたが、いずれ定着してくれるものと思っています。



農家巡り体験（森の学校・夏の自然教室）

——「こどもやまづくり教室」のプログラムは、どのようなものですか。

関岡 「こどもやまづくり教室」のプログラムの内容は、基本的には川場村の森林を守るためのさまざまな活動をするものです。森林体験活動の分野では、夏の教室では下刈りを中心に実施をしましたが、その中でも森に生えている植物や昆虫などの観察、あるいは沢に出かけて川の生き物の観察など多彩なプログラムを組み込んでい

ます。

特徴的なものとしては、地元の人が山にどのように関わってきたかを子どもたちの視線で調べさせるプログラムです。子どもたちが村のお年寄りを訪ねて、「子どもの頃の川場村はどうだったのか」、「山ではどんな遊びをしていたのか」、「山からどういう恵みを得てい

たのか」などを聞き書きにして、それを発表する活動をやりました。また、この森林体験活動で期待しているものは、森林づくりを通して自分たちの生活を見直すとか、世田谷の子どもと川場村の子どもがふれあうことで共通点とか、あるいは相違点とかを互いに発見することなどで、将来にわたっての息の長い地域交流を深める狙いを込めています。

——子どもたちの参加の動機は、どのようなものと思われませんか。

関岡 参加の動機は、親が「子どもに自然の体験をさせたい」という気持ち为中心で、子ども自身の意思で参加するケースはまれだと思います。ただ、兄弟で参加するというケースが多いことから、兄や姉が行っているのを見聞きして、「4年生になったら行きたい」という子どもも少なくないと思われませんか。また、友達から口コミで広がるケースもあると思います。ただ、参加するかどうかは、最終的には親の考え方とか、経済的な事情もありますから、親の意思に左右されます。なお、地区の学校にはポスターの掲示、募集パンフレットを置くなどの協力をお願いしています。

——参加費について、親の負担を軽減する措置を講じていますか。

関岡 参加費としては、宿泊費、交通費及び保険代といったところで、世田谷区と川場村から若干の補助をいただいています。東京の参加者については、都内の集合地点に集まってもらいチャーターバスで川場村まで来てもらっています。交通費については、このような方法で参加者の負担を軽減しています。川場村の参加者については、地元ですので現地集合まで送迎してもらっています。



学生のリーダー紹介（森の学校、夏の自然教室）

——学生リーダー養成とその役割については、どうですか。

関岡 東京農業大学の学生については、希望者を募り、リーダーという位置づけで参加してもらっています。リーダーにはプログラムの企画段階から参画してもらい、必要な備品を揃え、あるいは実施期間中の参加者の世話などを担当してもらっています。こうしたことは、学生のリーダーが中心となって行いますが、こうした活動は学生にとってもいい実習の機会となっています。

例えば、夏休みに行く夏の教室の場合は、5月ぐらいから毎週ミーティングを行ってい

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

ます。こうしたミーティングを繰り返して、本番の教室を迎えます。これ以外にも、やまづくり塾とか、ふるさと公社との打ち合わせなどがありますので、その都度、学生に参加を呼びかけスタッフとしてのトレーニングをしながら本番に入っていく、そういう手順を踏んでいます。

——森林体験活動において、特に注意しなければならないことがありますか。

関岡 長期にわたる体験活動には、幾つかパターンがあると思います。例えば、一つの活動が連続して連泊して行われるものもありますし、一つの活動が日帰りとか、1泊2日程度の短期でそれが長期間にわたって断続的に行われるものもあります。

長期にわたる森林体験活動において、特に注意しなければならない点としては、一つには地元の協力を得ること、二つには事故を起こさないこと、そして三つには長期滞在に伴う生活指導や健康管理の問題だと思っています。



森林体験をする子どもたち（森の学校・夏の自然教室）



子どもの生活指導と健康管理（なかのプラザ）

一つ目の地元の協力を得るためには、活動のフィールドを提供してくれた地権者や山林所有者の期待を裏切らないということが重要です。例えば、山林所有者などから活動の場としてフィールドを提供してもらう場合は、そこに具体的なメリットがなければ所有者の協力は決して得られません。

二つ目は、長期の活動においては事故を起こさないことです。事故とは、参加者やスタッフが怪我をしないことでもありますが、山火事などで財産にダメージを与えないことでもあります。樹幹に太いくぎを打ち込むとか、刃物で幹を傷つけるなどの行為は絶対にしてはなりません。所有者が、何十年にもわたって手塩にかけてきた樹木にダメージを与える行為は、厳に慎まなければなりません。地元の方が何を欲し、何を嫌がるのか、この辺については所有者と価

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

価値観を同じくすることがとても大切だと思います。ただ、この場合、一方的に地元の言い分を聞くだけではなくて、新しい価値観を見出すことも大切なことだと思います。

三つ目は、長期にわたるといふ宿泊を伴う活動においては、参加者の生活指導と健康管理に十分気をつけることが大切です。長期間の活動では、参加者の健康管理の困難さは、等比級数的に高まってきます。食事、排泄、入浴など日常生活の状況が現地で生まれるわけですから、生活面のすべてに配慮が必要です。共同生活面で不安がある場合は、プログラムの展開にも大きな影響を及ぼしますし事故の危険性も高まります。

「慣れ」に伴うトラブルがあります。最初のうちは互いが緊張感を持って行動していますが、日を重ねるごとに「いじめ」や「いやがらせ」などが発生する傾向があります。これについては、事前に十分に対策を講じておくことと、参加者の言動、行動には十分配慮することが重要になってきます。



充実したスタッフ体制（世田谷川場ふるさと公社）

っています。

そういう中で、地元でそうした経験をもったスタッフがいるということは非常に強みになります。現実にはそういうスタッフが少なくなっています。最近の傾向として、都市住民には休暇を利用して子どもをキャンプに連れて行ったり、ハイキングに行ったり、自然観察会に参加したり、そうした体験を積んでいる者が多くいます。一方、地元では身近に自然環境はありながら自然体験がないのが実情です。そういう意味で、森林体験活動を推進するためには、森林体験活動を指導できるスタッフの養成が急務になっていると思います。幸い、「世田谷川場ふるさと公社」は、川場村に本部を置き、365日森林に囲まれた環境にありますから、他の組織、団体にはない強みを持っていると思っています。

——今後の長期森林体験活動を推進するためには、どうすればいいと思われますか。

関岡 長期にわたる森林体験活動は、短期間では得られないメリットという計り知れないものがあると思います。最近の子どもたちは、自然体験が少なくなってきたというようなことを言われ始めてもう30年ぐらい経ちます。したがって、親の世代は自然体験に乏しい世代に育っていますから、子どもに自然体験を教えることができなくな

7. 世田谷川場ふるさと公社の取組

——健康村づくりを拠点としたと都市と農山村との交流事業——



傾斜を利用して建てられた「なかのビレジ」。屋根は土で覆われている。

【プログラムの概要】

- | | |
|-----|---|
| 名 称 | 子どもやまづくり教室（夏） |
| 主 催 | (株)世田谷川場ふるさと公社 |
| 日 程 | 平成19年8月7日(土)～8月11日(土)
4泊5日 |
| 場 所 | 群馬県利根郡川場村谷地 友好の森 |
| 施 設 | なかのビレジ |
| 対 象 | 小学4年生～6年生 50名 |
| 参加費 | 23,100円（宿泊・食事、保険料、交通費） |
| ねらい | 森林に親しみ、遊びながら、その楽しさや大切さを学ぶプログラム。生活環境の異なる子どもなる同士が、同じ時間を共有することで心の成長を促す。実際に下草刈り体験など子どもたちによる森づくり活動を実施。
(プログラム事例・215頁参照) |



話し手：世田谷区民健康村
(株)世田谷川場ふるさと公社
なかのビレジ所長 岸昌孝氏

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——健康村が目指しているものは何ですか

岸 当社は、世田谷区民健康村づくり事業^(注)として建設された「ふじやまビレジ」と「なかのビレジ」の二つの施設の管理運営をはじめ、この施設を拠点とした健康村づくりのためのさまざまな活動を行っています。設立は昭和61年で一昨年20周年を迎えました。また、昨年より地方自治法に基づく指定管理者の指定を受けています。

私は、「なかのビレジ」の運営を担当していますが、両施設の年間利用者は延6万5千人を超えています。公共の保養施設としては高い利用率だと思います。

ご覧のように、この周りはリンゴ畑と森しかなく、いわゆる観光施設というようなものは一切ありません。どうして何もないこんな所に沢山の人がやってくるかといいますと、それにはさまざまな仕組み、仕掛けがあります。ここには森や里に行きたくなるような仕組みとか、さまざまな仕掛けがあり、また施設利用者同士がコミュニケーションしやすいようになっています。



清閑とした森の景観が心を癒してくる（なかのビレジ周辺）

例えば、宿泊している利用者に、『明朝9時から森の中を案内します』とアナウンスします。参加費は300円から500円程度に設定し、利用者が気軽に参加できるようにしています。参加者の中には、いろんな知識を持っている人がいますので、道端の植物を指差して『あ、これは〇〇だ』と言ったら、その人にもっと喋ってもらうように仕向けます。他の人からも『俺が子どものころは、こんなふうにして遊んだよ』とだんだん話題が広がっていきます。あるいは、子どもがトカゲを捕まえると、『みんな来てごらん、トカゲを捕まえ

(注) 昭和56年、東京都世田谷区と群馬県川場村の間で結ばれた「区民健康村相互協力に関する協定」に基づく交流事業。この交流事業では、豊かな自然の恵みと人々がふれあうことを通じて、都市と山村の交流を深める「第二のふるさと」づくりを目指す。

たよ』と呼びかけます。そういう形で互いの接点ができるのと親しみが湧いてきます。特に、子ども同士はすぐに友だちになってしまいます。

こういう来館者の間に接点が出来上がってれば、施設内で子どもが騒いでも隣部屋同士がトラブルもなることはまずありません。また、大きな食堂で一斉に食事をするシステムになっていますので、いろんな形で利用者同士の会話ができるようになっています。また、棟ごとに畳敷きの大広間が詠えてありまして、イベントではミーティングを開くこともできます。そういう機会には、『差し障りがなければ、お名前と出身地を教えてくださいませんか』と問いかけて自己紹介を始めるわけです。『この喋り方で分かると思うけれど、私は〇〇の出身だよ』と切り出しますと、『俺はその近くの生まれだ。うちのかみさんの出身地だ。そこには行ったことがある』と会話が弾みます。お酒でも入りますともう大変な盛り上がりとなりますね。



畳敷きの大広間でのミーティング（なかのビレジ）

こうした出会いが都市住民にとって一番の魅力だと思っています。都会のマンションに住んでいますと、もう隣にどんな人が住んでいるか分からない。ところがここで出会った人同士が、街を歩いていてバッタリ会ったとか、スーパーで買い物をしているとき会ったとか、そういうふれあいが生まれるのです。いわば都会では失ったコミュニケーションをここで取り戻すことができるのです。

ある意味で、この施設では不便を少し残していると言ってもいいかも知れません。利用者を快適に過ごさせる、何でもかんでも用意してあげるというのではなくて、本来のコミュニケーションを取り戻してもらおうキッカケづくり、仕掛けを用意しているのです。

——子どもたちが、ここに毎年やって来る魅力はどういうところにありますか

岸 私は、小学生の時代に親から離れる、何でもやってくれる親が近くにいないという機会がとても大切ではないかと思っています。例えば、集団生活の中では、どうしても友達ができない、そこで何とか頑張ろうとする。でも普段からそうした訓練ができていないからなかなか友達ができない。また、親が何でもやってくれるから、「準備がもたもたする」とか、「忘れ物をする」とか、そういう甘えに気付くのです。

子どもさんをここに参加させている親御さんの中には、「親の言うこときかない」、「親離れできるか心配だ」、あるいは「友達がいらない」という方がいます。そうした子どもたちは、ここでの集団生活を通して自分の得意とするものを見つけるなど、自分に気付く子どもも少なくありません。

ここで行っている子どもを対象としたプログラムでは、体験学習とか、環境教育とかにはあまり意識をしていません。子どもたちは、大学生のお兄さん、お姉さんが面白いことをやって見せたり、教えてくれたり、遊んでくれたり、あるいは叱ってくれたり、そういうお兄さん、お姉さんに直に触れることが子どもにとっては大変魅力なのです。子どもたちが、毎年やって来るかという一番の理由はこうしたことにあります。ここに来ると、あのお兄さん、お姉さんに会えるかもしれないという期待があるのです。



人にふれあうことが子どもにとっては大変魅力だ（夏の自然教室）

——現代社会においては子どもの時代に、草にかぶれたり、毒虫に刺されたり、あるいはナイフで指を切ったりする体験が無くなっています。人間は、このようなショッキングな出来事を明確に覚えていて将来の同じような状況に対応できるようになっています。そういう意味で、私たちは子どもにどういふことをすべきだと思いますか。

岸 私たちとしては、便利な情報社会に毒された子どもたちを、できるだけ野外に連れ出して、デコボコ道を歩かせるとか、時には雨の中を歩かせるとか、そういう人間の遺伝

子のバージョンアップができればいいなと思っています。舗装された平らなところを歩き、エレベーターやエスカレーターを使い、かすり傷の一つも負ったことがない。そういう人間が世代交代をしていったらどうということになるか、考えるだけで恐ろしいことです。

ですから、プログラムの内容にこだわるというよりは、自然の空間に子どもを放り出す、そこでさまざまな体験をさせることが大切だと思います。アブやブヨに刺されるとか、川の中はヌルヌルするとか、そういう感覚が人間の遺伝子のバージョン維持につながるのだと思います。頭の中で描いているイメージと、実際の自然は本質的に違いますから、そうした自然を体験していない子どもは、想像したり、新しいものを創り出すことは難しい。また、そういう子どもが大人になって、「環境を守ろう」と言っても説得力はありませんよ。



力を合わせてリヤカーを押し上げる子どもたち（夏の自然教室）

——そういう効果を上げるには、どれくらいの期間が必要だと思いますか

岸 今回の「こどもやまづくり塾」は4泊5日の日程ですが、できれば最低1週間は欲しいですね。というのは、その期間があれば互いに認めあうことができる。例えば、ちょっと手の遅い子がいて、いじめに遭いそうな子どもがいたとします。ところが、長期キャンプの中では、そういう子どもが活躍する場面が多々あります。いつもは目立たない子どもだけど、薪に火をつけるのがとても上手とか、夜空の人工衛星を見つけるのが得意とか、24時間の生活の中では幾度も存在感があらわれます。そうすると、仲間が認めてくれるようになる。現代社会の中では便利さと効率性が優先しますが、長期キャンプの中では見えてこない個性が見えてくるものです。日常の子どもたちの忙しい生活の中ではこうしたことはなかなか難しいのです。理想的には2週間という体験が望ましいと思いますが、現実的にはかなり難しいですね。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——学校の先生が子どもたちを森に連れていくことを躊躇している向きがありますが

岸 学校の先生の立場は分からないでもないのですが、いま話題のモンスターペアレントといわれるごく一部の親御さんがいます。ここでも、『建物の中には虫なんか入ってきませんよね』という電話がかかってきたことがあります。『山の中ですから虫はたくさんいます。この周りには熊も棲んでいますよ』というと、『どうして、そういうところに子どもを連れて行くのだ』と怒鳴られましたよ。そういう親御さんたちと接している先生は、精神的に参ってしまうでしょうね。また、卒業アルバムを見て『うちの子の写真が他の子よりも1カット少ない。全部回収して作り直せ』とか、『うちの子が手を挙げているのにわざと指さなかった』とか理不尽なクレームで、ノイローゼになった先生がいるそうです。都市に行けば行くほど、そういう傾向が多いとも聞いています。

——ここを訪れる利用者は、どういうことを期待していると思いますか

岸 住民の中には、世田谷区の施設だからさぞ立派な保養施設だろうと期待してやって来る人がいます。でも、期待が外れて『我々の税金を使って、何でこんなところにこんな施設を造ったのだ』と罵声を浴びせられることがありました。私たちとしては、『お客さまのお気持ちはよく分かりますが、でもここは年間7万人の区民の方が利用者されていて、毎週キャンセル待ちのお客さまがいらっしゃいます』と答えるようにしています。



環境に配慮してフェンスが張られていないリンゴ園（川場村）

また、この周辺では環境に配慮して、できるだけ農薬の使用を控えています。また、川場村では果樹園にはフェンスを張っていません。隣の町や村では、リンゴ園とか、ブルーベリー園とか、ブドウ園とかでは盗まれないようにフェンスを張ってあります。どうして川場ではフェンスを張っていないかといいますと、村の景観を壊してしまうからです。これは川場村の農家の方の哲学と協力があってこそ実現したことです。また、ゴミが捨てら

れそうな所には花を植え、ゴミを捨てにくいようにしています。そういうことを、来村者に一つひとつ丁寧に説明しています。こうしたことが理解されて、ここを訪れるリピーターが増え、そのリピーターの方が新しいお客さんを連れてくるということにつながっているのだと思います。

——この施設の運営方式についてどう考えていますか

岸 私どものふるさと公社は、これまでの20年の実績がありますから、今回は行政側からご指定をいただきました。しかし、3年後には競争することになります。そのため、今から準備を始めているところです。ただ、こうした事業の運営については、効率性とか収益性だけを追求していいものかどうか、この施設の目的にそぐわなくなるような気がします。

先日、お客さんの一人が『横浜のマンションに引っ越したけれども、その後で世田谷区民でないとここを使う資格がないことを知った。それが嫌で、また世田谷に戻ってきました』と話していました。そのご家族は、子どもさんが小さい頃から川場村で遊び、いろいろなイベントにも参加していたということです。

ここで活動している学生ボランティアは大学生だけではありません。地元の高中生たちも協力しています。そうした学生ボランティアが川場を案内したり、子どもたちの遊び相手をしています。夏休みが終わると学生は世田谷に帰りますが、ここで親しくなったご家族の家に呼ばれて、『今日はうちへ食べに来なさい』ということになる。また、それが縁で家庭教師をやっているとか、就職までも面倒をみてもらった学生もいます。そうした20年の歴史の重みを感じています。

やはり効率性とか、収益性だけではなくて、形には表せないさまざまな人の結びつきやここで果たしているさまざまな活動を評価してもらえればと思っています。



キュウリの生かじりの喜ぶ子どもたち（夏の自然教室）

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

—— 一般の来村者向けには、どういう体験プログラムがありますか

岸 最初のころは、スタッフやボランティアによる自然観察会を行っていきまして、この施設周辺の森を案内していました。お客さんから、『この花は何ですか。この木は何ですか。あの鳥は何ですか』と質問されます。ところがスタッフやボランティアは専門家ではありませんからうまく説明ができなくて、気まずい思いをする場面がしばしばありました。そこで、お客さんと一緒にあるがままの自然を楽しみましょうという「ナチュラルハイク」という呼びかけにしました。景色のいいところでは休憩をし、樹木に触ったり、せせらぎで遊んだり、自然体で楽しむようにしたのです。

さらに森だけではなくて里の方に下りて、森と里をセットにしたガイドを始めました。これを私たちは、「カントリーガイドウオーク」と呼んでいます。このガイドでは、農家の方の話を聞いたり、畑でキュウリを採ったり、新鮮なトウモロコシを食べたり、完熟したトマトをいただいたり、また農家体験も楽しんでいます。秋ともなると、周辺のリンゴ園で真っ赤に熟したリンゴもぎをするなど、お客さんに大変喜ばれています。



都会の人と村の人たちとの交流会（中野地区集会場）

——これまで、お客さんと村人たちとの間にトラブルはありましたか

岸 私たちはむしろトラブルがあったほうがいいと思っています。というのはトラブルが起きる前に防いでしまうと、何が問題なのかがよく分からなくなってしまいます。例えば、林間学校などで世田谷の子どもが、牛を飼っている農家の前で「臭い、臭い」と叫ぶと、先生も一緒になって「臭い、臭い」と言うことがあります。そこで私たちは、『ここには、皆さんと同じぐらいの子どもが住んでいます。そういう人が嫌がるようなことを言っていると、世田谷のすべての子どもがそういうふうに使われますよ』と諭しました。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

この施設が出来てからすぐ、村内にスキー場がオープンしました。当時、観光客の伸び率の第1位が千葉県浦安市のディズニーランド、第2位が岩手県の安比高原スキー場、そして第3位が川場村でした。そこで、どうして知名度が低い川場村に観光客がいっぱい来るのかということが話題になり、新聞などに取り上げられたことがあります。当時、村の中はまだ道が整備されていなかったため、そこにスキーヤーや健康村に向かう車が雪道を滑りながら走ってくるのです。そうすると、子どもたちは除雪した道の脇を歩くことになって、「健康村は帰ってくれ」という声が上がりました。

そんなとき、世田谷との交流イベントがあって、世田谷の人が『世田谷はあまりいいところではないけれども、緑道（りょくどう）というものがある。汚くなった川に蓋をして、その上に緑の公園を作った』と自慢したのです。それを聞いて、『川場村には健康村ができ、そしてスキー場ができたが、おかげで雪が降ると安心して子どもや年寄りが道を歩けない。世田谷のような緑道をつくって、川場の子どもを安心して学校に通わせたい』と声を上げたのです。そうしたら世田谷区の人たちは、『こんなにきれいな川があってアユやヤマメ、そしてカジカがいる。そんな川に蓋をするなんてとんでもないことだ』と猛反対しました。これに対して、『都会の人が大勢やって来ることで、ここに住んでいる人たちは多変迷惑しているのだ』という応酬がありました。こういう論議は、都市と地方との交流イベントが開かれたことで初めて分かったことです。そこからイベントが加速して、「山村に住む、山村の暮らし」をどうフォローしていくかということが真剣に考えられるようになったのです。



森に囲まれた清流での川あそび。子どもの歓声が響きわたる（赤倉溪谷）

——いきいきとした子どもたちを育てるために、今後どういうことが考えられますか

岸 中学生や高校生向けのプロジェクトが不足しています。子ども向けとか、ファミリー向けとか、年配者向けといったプロジェクトは沢山あるのですが、社会に出る一歩手前の中学生や高校生向けのプロジェクトが非常に少ない。1つには、問題を起こしやすい年齢だったり、主催者としてとても扱いにくいというのが本音としてあるかもしれません。



自然の中で子どもたちの歓声が沸きあがる（なかのビレッジ）

しかし、社会に出る一歩手前の中学生や高校生たちに「どれだけいい情報を提供してあげられるか」、「どれだけ魅力的な人と出会えるか」というのが、将来にも大きく影響するのではないかと思います。

私は、これまでいくつかの中学生や高校生向けのプロジェクトを他のところで見てきましたが、この年代は非常に多感で感情が旺盛です。1週間のプログラムだと最後は泣き別れの状態です。行動を起こすのも早く、社会人になる一歩手前として重要な意味を持っていると思います。一緒に過ごした大学生のお兄さん、お姉さんたちがなぜあのような活動をしていたのか、どうしてあそこまで頑張ることができるのだろうか、すぐにハートに火が点くのですね。そういう意味で、この年代のプロジェクトができればいいなと思います。

8. キープ自然学校の取組

——自分のことは自分でやる「子どもが主役」のキャンプ——



いちばん☆キャンプのはじまり（清里高原）



話し手：
（財）キープ協会・キープ自然学校
いちばん星☆キャンプ事務局
村本真洋氏

【プログラムの概要】

- 名 称 2006年度いちばん星☆キャンプ
冒険！長期村
- 主 催 （財）キープ協会・キープ自然学校
- 日 程 平成18年8月10日(木)～8月17日(木)
7泊8日
- 場 所 山梨県北杜市清里高原
- 施 設 キープ自然学校ユースキャンプ場
- 対 象 小学4年生～中学3年生 25名
- 参加費 70,000円（宿泊・食費、運営費、保険料）
- ねらい 「食べる」「寝る」「遊ぶ」といった暮らしはすべて子ども自身で作りあげる子どもが主役のキャンプ。「村の生活の慣れる期間」「キャラバンに出かける期間」、「村の生活を創る期間」に分けて実施。

——まず、今回の「いちばん星☆キャンプ」の狙いは、どこにありますか。

村本 「いちばん星☆キャンプ」の狙いは、子どもの成長です。例えば、キャンプの中で、薪を集めたり、火を熾したり、野菜を切ったり、そうした体験を通して技術的な目に見える部分の成長と、こういったキャンプが原体験となってその子が将来何かの機会にこのキャンプのことを思い出したり活かしたりするといった種を撒く部分の成長を目指しています。活動の中で大事にしていることは「子どもが主役」ということです。なるべく多くのことが許された中でスタッフは子どもたちを見守るというスタンスを大切にしています。

——リーダーが、あまり口出ししないで、子どもたちが自ら考え行動する、そういう活動ということですか。

村本 「いちばん星☆キャンプ」では、いくつかの「おきて」を決めています。その基本は、「自分のことは、自分でやる」ことです。あくまでも子どもが主役で、リーダーはそのサポートをするという考え方です。ですから、リーダーはできるだけ余計な口出しはしません。例えば、火を熾すときでも、グループの子どもたちが試行錯誤を繰り返しながらやり遂げる。中には、なかなか火を熾せないグループもありますが、その場合でもリーダーは手出しをしません。もちろん、危険な行為については、しっかりサポートしますが。たくさん失敗してもいい、失敗したらどうしたらいいか、そのグループのなかで考えさせるようにしています。

今回のキャンプは、7泊8日という時間がたっぷりありますから、とにかく自分たちの力でやってみよう、そういう自立、助け合い、思いやりの精神を大切にしています。



長期村の掟は、「自分のことは、自分でやる」(清里高原)

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——今回の「いちばん星☆キャンプ8月の村」は、小学校4年生から中学3年生までが対象ですね。年齢の違う子どもたちが一緒にキャンプ生活をするという活動のねらいは、どういうところにありますか。

村本 このキャンプは、2002年度から始めました。初年度は、小学校3年生から6年生までの小学校の高学年が対象でしたが、2年目は前の年に参加した子どもたちが参加できるように小学校3年生から中学校1年生に広げました。3年目は、さらに広げて小学校2年生から中学校2年生とし、昨年度は小学校1年生から中学校3年生に拡大しました。

年齢の異なる子どもたちを対象にしたキャンプでは、中学生が小さい子どもの面倒をみるとか、上下関係のいい面も出ましたが、それがマイナスに働いてしまうことがあります。これだけ年齢が広がってしまうと、プログラムを年齢の低い層に合わせざるを得なくなってしまう。そうすると、高学年にとってはちょっと面白くない。やっぱり中学生は中学生なりに、期待しているものがあってそういうのがうまくできなかった。

そうした反省に立って、今年度は小学校4年生から中学3年生までに対象を絞りました。小学校1年生から小学校3年生までは別の月に実施しています。異なった年齢の子どもたちの集団生活という中では、年齢の高い子どもが下の子の面倒を見たり、助けたりとか、今の社会ではあまり経験できないような場面がでてきます。互いに刺激しあう、これは子どもたちにとって大変重要な人生体験となると思いますね。



長期の自然体験プログラムに参加した異年齢の子どもたち（清里高原）

——そういう人生体験が、このキャンプの中ではできるということですね。人間形成の面でも大変に意味があるということですね。

村本 僕らが子どもの頃は、そういうことは普通でした。しかし、一人っ子や地域の連携が希薄になった今の社会では、非常に大切な体験だと思います。そうした機会を提供できるのも、私たちの一つの役割ではないかと思っています。こういう共同生活を通じて、

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

培われる人間性、人間的な成長というものが期待できると思います。上の子どもは、下の子の面倒を見ますし、下の子どもはお兄ちゃんとかお姉ちゃんの姿を見て、ああいうふうになりたいとか、一つの目標にするとと思います。そうした体験は、大人になってもいつか生きてくると思いますね。



皆で力を合わせてテントを設営する（清里高原）

——キープ自然学校の受け入れ体制は、どうなっていますか。

村本 キープ自然学校は、大きく分けて3つの受け入れチームからなっています。一つは宿泊施設の運営をするチーム、二つは食事を担当するチーム、そして私たちの自然体験活動を実施するチームです。

「いちばん星☆キャンプ」は、これまではキープ自然学校に泊まっていたのでこれら3つのチームが一緒になって実施してきましたのですが、今年は宿泊施設を離れテント泊、自炊を中心に活動しているので、私たちのグループが主に実施しています。それだけ、私たちグループのスタッフが、子どもたちと一緒に生活する時間が多くなりになり、今まで以上に子どもたちに接する機会が多くなりました。

——「いちばん星☆キャンプ」のほかに、どういうプログラムがありますか。

村本 3歳児から6歳児までの幼児とその親を対象とした「キープ森のようちえん♪」があります。その他、一般の方や親子を対象とした「森の教室」というシリーズものがあります。このシリーズは、季節ごとにテーマを設け、例えば、5月ですと山菜を採ってきて、調理して食べたりします。6月ですと、近くの須玉町の梅を育てている農家に行き、親子で梅をもぎ、梅ジュースや梅酒を作ったりします。あとは、ファミリーキャンプ（1泊2日）、森とか牧場のフィールドを使った「まきばの楽校」などがあります。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——幼児の時代に自然に親しみ、体験をするということはその子にとって、非常に大切なことですね。

村本 小さいうちに、森の中で遊んだ経験はすごく大切だと思います。森の中での学習とか、木の名前を覚えるということではなくて、その自然のフィールドの中で過ごす体験が非常に大切だと思っています。そうしたことが、心の奥底に深く刻み込まれるのではないかと思います。自然の中で過ごした経験を持つ子どもというのは、人間的にも豊かな心の持ち主に育っていくと考えています。

——私たちの年代では、山、川、野原、田畑といった自然の中で、思いっきり遊んだ経験があります。日常生活の中で、ごく自然にそうした体験を得ることができた。しかし、今は組織的に、計画的に、そして親と一緒にやらなくてはならない、そういう時代になっているのですね。

村本 キープ自然学校では、幼児を対象とした「キープ森のようちえん♪」というのがあり、次に小学生や中学生を対象とした「いちばん星☆キャンプ」など、子どもの成長過程に沿ったプログラムを組んでいます。さらに、将来的には高校生向けの自然体験キャンプを考えていきたいと思っています。



多彩な自然環境に恵まれたフィールド（キープ農場）

——そうした自然体験をもった子どもたちが、大きくなって自然に興味を持ち、次の世代にそうした経験を継承できれば理想的ですね。また、将来、ファミリーを連れて子どもを連れてくる、そうした将来を見据えているのですか。

村本 この「いちばん星☆キャンプ」を始めたビジョンの中では、10年の視点というものを考えています。例えば、小学校3年生（9歳）で参加した子どもが、10年たって大学

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

生（19歳）になり、リーダーとしてこのキャンプに参加してくれる。そのぐらいの長いスパンで見えています。実は、僕も小学校6年生のとき、キープ協会の「おおぞらキャンプ（夏休みに行なわれていた子どもキャンプ）」に参加しました。そのときの体験がすごく強烈で、ここでこうした仕事をしていることに繋がっています。今の子たちにも、同じようになっ
てくれればいいなと思っています。

——キープ自然学校では、参加者をどのように募集されていますか。

村本 キープ協会のホームページ、キープ協会環境教育事業部が発行するメールマガジンそれにチラシです。チラシは、近隣の施設においてもらうことや関係団体に送って知らせています。

——参加者は、主にどの地域が多いですか。

村本 大きく分けて、山梨県と関東地域が半々ぐらいですね。地元の参加者が多いのが特徴です。

——参加料は、今回の「いちばん星☆キャンプ8月の村」で、どれほどですか。

村本 参加料は、7泊8日のコースで7万円です。ただし、兄弟で参加する場合は、2人目の子どもについては、1泊につき1000円割引しています。また、兄弟が「いちばん星☆キャンプ」の別の日程に参加する場合についても、同じように割引をして、参加しやすいように工夫しています。できるだけご家庭に負担がかからないよう配慮しています。



八ヶ岳の清冽な川俣溪谷
(川俣川溪谷自然観察園遊歩道)

——自然体験活動のフィールドは、キープ自然学校の周辺となりますか。

村本 ほぼ、キープ協会の敷地内及びその周辺地域です。ほとんどが牧草地とそれに付随する森が中心です。その他、近くの川俣溪谷を利用しています。特に、夏休みのプログラムでは、溪谷での川遊びは大変な人気があります。

——今回の「いちばん星☆キャンプ8月の村」では、すべて野外ということですが、そのほかに宿泊施設を利用したプログラムというものがあるのですか。

村本 キープ自然学校は本来が宿泊施設ですから、施設を利用して森などのフィールドに出掛けるとい
うのがメインです。そういう意味では、今回の「い

ちばん星☆キャンプ8月の村」は特異なプログラムです。また、キープ自然学校では、キャンプ場も運営していますので、施設が満杯のときは、キャンプ場を利用することもあります。

——自然体験プログラムを運営する場合の体制は、どうなっていますか。

村本 今回の「いちばん星☆キャンプ」は、キープ自然学校のスタッフが主体となって運営していますが、大学生のリーダーや社会人の方に応援をいただくこともあります。また、必要に応じて環境教育事業部のスタッフに応援してもらうこともあります。その辺は、規模に応じて臨機応変にやっています。

——これまでキープ自然学校で行われた自然体験活動に対する子どもや保護者からの反応はどうですか。どういった感想が寄せられていますか。

村本 子どもからの感想はなかなか返ってきませんが、キャンプを終えたあと保護者の方からメールをいただきます。それによると、「とても楽しかった」とか、「学校での出来事はあまり話さないが、キャンプでの出来事は1から10まで細かに説明してくれ、すごく驚いた」などといった感想が多いですね。そういうことから、人とのコミュニケーションがうまくとれるようになった、家族での親子の絆がとれるようになったという効果も強く感じますね。



キャンプ場に移動する子どもたち。自分の持ち物は自分で運ぶ（清里高原）

——長期の自然体験をすることによって、自然への親しみを感じるとともに、コミュニケーションがとれるようになったとか、親子の絆を築くことができたという意義は大変大きいですね。

村本 やっぱり自分が体験したことをしゃべることによって、より深く体験としてその子の心に落ちていくのでしょうか。また、そうしたことを共感してくれる大人が傍に居ることが、子どもにとって大変うれしいことだと思います。楽しい体験がどんどん膨らんでいくのです。親子で共通の話題ができるということは望ましいことですし、そのことがその子の成長の次のステップに繋がって行くと思います。そうした効果から、参加者はリピーターが多くなっています。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——遠くから保護者らしい方が、心配そうに様子を見ているのを見かけました。親としても自然体験活動に強く期待する一方で、心配でもあるのですね。

村本 去年、「いちばん星☆キャンプ」に参加した子どもたちの保護者がメーリングリストを立ち上げ、「いちばん星☆キャンプ」と同じ日程で、保護者だけのキャンプを設営し川遊びをしながらバーベキューなどをやっています。子どもの近くにいることで安心していらっしゃるご家庭も多いようです。このキャンプをきっかけとして、大人の方が集まって、また大きなネットワークが出来つつあります。

——保護者ネットワークができるのですね。今後は、こういった活動を考えていますか。

村本 できれば山村留学のような自然体験が展開できないかと考えています。年間を通じて生活をしながら自然体験学習ができないか。そのためには、いろいろとクリアしなければならない問題があると思いますが。



自然体験を通じて、人間形成を築く

——最後に、行政や学校教育に対して、何か要望されることがありますか。

村本 最近、子どもたちにとって、自然体験が重要だと感じています。こうした活動が全国的に広まってくれればいいと思います。やはりどうしても参加費の面で制約がでますので、誰でも参加できるような仕組みができればいいなと思いますね。

また、学校教育の面からは、教育委員会とか学校側と私達が連携してより良いプログラムを提案できたらと思いますね。そして、子どもたちと一番接している学校の先生方にも自然体験を楽しんでもらいたいと思います。そうやって私達と先生方が一緒になって実施する中でお互いに成長していくことが大切だと思います。

昨年、山梨県の学校の先生が、私どもの自然学校に研修に来られ、一緒に「いちばん星☆キャンプ」をやりました。そうした試みがどんどんできて、多くの先生が自然体験活動に参加してもらえば、理解も深まり、新しい展開が生まれるのではないかと期待しています。

やはり事業体としては、限界がありますから、行政として、また学校教育としても積極的に自然体験の現場へ足を踏み入れていただければ、もっといい成果がでてくると思います。

9. グリーンウッド自然体験教育センターの取組

——自然体験、山村体験を通じて環境教育を推進する——



豊かな森林に囲まれた長野県下伊那地方の景観



話し手：NPO 法人グリーンウッド
専務理事 辻 英之氏

【プログラムの概要】

- 名称 07夏の信州こども山賊キャンプ
主催 NPO 法人グリーンウッド
自然教育センター
日程 平成19年7月21日(土)～7月30日(月)
9泊10日
場所 長野県泰阜村左京川キャンプ場ほか
対象 小学4年生～中学3年生 20名
参加費 103,500円(宿泊費、食料費、キャンプ、運営費、保険料)
ねらい 信州の地域、暮らしに根ざした自然体験活動を通じて、「自立」「共生」「自然の理解」を学び、心の豊かさと生きる力を育む。

——この地で自然体験活動を始められたきっかけは何ですか

辻 グリーンウッドの活動が始まってから今年で 21 年目を迎えます。そもそもは、グリーンウッド会長梶さち子が、東京で幼稚園の先生をやっていたときに、子どもの体験活動が非常に不足していることに嘆きまして、教え子等にキャンプを勧めたことがきっかけです。枠にはめられた堅苦しい教育ではなくて、豊かな自然環境のなかで、子どもたちを伸び伸びと育てることをめざしたものです。

最初に手掛けたのは山村留学・暮らしの学校「だいだらぼっち」でした。他人に子どもを預けるということは、子どももその親も相当の勇気が必要です。他方、受け入れる側としても、その土地に住み着く覚悟がなければとてもできないことです。同僚の方がたまたま飯田の出身ということで付近の土地を探していたところ、行政として泰阜村が受け入れを表明してくれました。村としては急激に過疎化が進んで子どもの数が激減し、このままでは学校の維持ができないという課題を抱えていました。

当時、戸塚ヨットスクール事件^(注)が社会問題となっていて、これまで平穩に暮らしてきた村の人たちにとってみれば、『都会の若者が1年間も子どもを集めて一体何をやるのか』という疑りがあって、なかなか理解を得ることは難しかったのです。いわば『都会の人に来て欲しくない』という排他的な感情が根底にあったのです。そうした中で、説明会を何回も開いて粘り強く説得し、ようやく半年遅れで活動が始まったのです。これが、昭和 61 年の 9 月のことです。

——グリーンウッドの活動理念は何ですか

辻 活動の理念としては、豊かな自然環境の中で長期間に亘って子どもと一緒に過ごすことが大事な教育活動の一つということで、この考え方は今でも変わっていません。しかし、20 年前の村の人たちの雰囲気というものはまったく違っていました。ボランティアという概念もまだ定着していませんし、もちろん NPO という言葉もありません。また、I ターンという言葉もありませんでした。この 3 つの言葉は、今の我々の活動にピッタリですが、当時は思想集団とか、何かの宗教団体みたいな印象を持たれて、なかなか受入れてもらえる雰囲気ではありませんでした。

村の人たちは、ここには「何もない」とよく言いますが、その何もない土地で生き抜いてきた人たちの暮らしとか営みの中にこそ学ぶべきものがたくさんある、そういうふうに思っています。手間暇かけることが土台だろうし、そういうことを通じて学ぶ得ることがたくさんある。この考え方は、発祥のときから今まで引き継がれています。

(注) 昭和 58 年、不登校や非行、情緒障害児をヨットの訓練を通して健全な精神と肉体を作ることを基本とした全寮制の戸塚ヨットスクールで起きた傷害致死事件。

——村の人との信頼関係を得るために、どのようにされたのですか

辻 最初の3年ほどは、「この人たちは何だろう」という雰囲気があったようですが、私たちとしては意味のあることをやっている、村の一員として一生懸命にやっているという自負がありました。自治会の役員もやるし、PTAの役員もやるし、消防団にも入りました。また、村の共同作業にも喜んで参加しています。そういうことを積み重ね、やり続けることによって、ようやく村の人たちに理解され、信頼をもらったと思っています。そうですね、こうなるまでには10年ぐらいかかったかな。

——山村留学に対する学校の反応はどうですか

辻 同じように、子どもが1年を通じて学校に通うことで、『やっぱり山村留学の子どもが来てくれてよかった』というふうになるまでには、やはり10年ぐらいはかかったと思います。というのは、この村では子どもたちは保育園から中学校まで同じメンバーで過ごすのです。ところが、そこにまったく違う気分を持った都会の子どもがやってくる。しかも、毎年違う顔ぶれがやってくるのです。村の子どもたちにとっては興味津々ですが、学校の先生としてはすごくやりづらい。折角作り上げたチームワークが、都会の子どもが入ることによって違うかかわりができてしまうのです。



「いだらぼっち」の宿舎で一緒に勉強する子どもたち
(左上はグリーンウッド会長梶さち子さん)

そういう意味で、学校の先生にとってはあまり歓迎すべきことではなかったのです。しかし、10年経ち、いまでは20年目を迎えますが、そうした雰囲気は相当変わってきたと思います。今では、今度はどんな転入生が来るだろうという期待があるようです。新学期になると、東京、大阪などの大都市をはじめとして県内外からたくさんの子子どもがやって

きます。それによって、新しい交流関係が生まれ、新しい発見もあり、また教育向上にも繋がってくる、そういうことを肌で感じられていると思います。

それと、今の村の若い夫婦は山村留学の子どもと一緒に過ごした世代です。ですから、20年前とは違って、山村留学に対する理解力はすごく早い。また、ここで山村留学を経験した子どもたちが結婚して、子どもを連れてキャンプに来ています。中には、『子どもを一年間預けたい』という親もいますが、それができれば一つの成功かなと思います。最初に来た山村留学の子どもは、今34歳になっていますよ。

——山村留学の受入施設や運営はどうされたのですか

辻 昭和61年当初は、農家の空き家を借りて、子どもたちと一緒に生活を始めました。その延長の中で、「自分たちで自前の家を建てたい」ということになった。そこで、電柱や枕木などの廃材をもらってきて、子どもたちと一緒に手作りの家を建てたのです。ただ、この家は今でいう耐震性に問題があり、いずれ建てかえる必要がありました。しかし、こうした自然体験事業では十分な資金を用意することはとても困難な状況です。その時、村の議会や村の人たちが一緒になって行政に働きかけてくれたのです。我々としては、シンボリックな建物を壊すのは本当に忍びなかったのですが、林野庁の制度を活用して、県、村、それから地元の木材業界からの援助を受けてこの施設が完成しました。

その時点で、指定管理者制度を活用させていただいて、我々に運営を任せていただきました。運営体制は、平成5年に任意団体としての規約などを整備していましたが、平成13年に「NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター」として設立しました。



山村留学の20名の子どもたちとスタッフが大家族として生活する暮らしの学校「だいだらぼっち」の母屋（グリーンウッドHP）

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

そういうことで、施設自体は村の財産ですけれども、運営については発祥の経緯からすべてグリーンウッドが運営しています。村からの委託料といったものは一切ありませんので、建物などの維持管理、光熱費、水道料まですべてグリーンウッドが賄っています。その代わり収益が上がれば、それはグリーンウッドのものであります。そういう契約になっています。この辺は、村としてもよく承知してもらっていて体験活動が十分にできる場、あるいは環境といったものを提供してもらってしまして大変有難いと思っています。これからは、村に何らかのかたちで恩返ししなければならない、そういうふうに思っています。そういうことで、互いにいい連携がとれているのではないかと考えています。

——村との信頼関係は築けましたか

辻 村としてはまったくお金も人手をかけることなく、毎年、山村留学の子どもたちが20人ほどやって来るのです。村の学校の子どもの数が維持される、キャンプに人がやってくる、若者が定住しはじめた、という状況が生まれています。

そういう状況をみて、他の町村では『何と泰阜村はうまいことをやっている』ということになった。他の町村では、山村留学のために2、3千万円もの予算をつけたのにたった5人しか集まらないというようなことがあったのです。村の人たちが、『ほとんどお金を掛けずに、毎年子どもたちが村にやって来る。そして、楽しそうにやっている』と言い始めると、村の議会としても『これは、ちゃんとしてやらないといけない』ということになった。

そこで、『こんな危ない建物ではなくちゃんとした建物に建て替える』と逆にきました。その当時としては、村から支援を受けることで、いろんな面で制約があるのではないか、あるいは行政の言うことをきかなければならない立場になるのではないかと、という懸念があつてちょっと躊躇しました。我々の発祥の起源として、自由度がなくなるのは非常につらいのです。それぐらいなら、我々が信じる教育理念の下に、自立してやっという覚悟でした。それが、後で『結果的によかった』と村長も議会も言ってくれました。

行政にあまり頼らないということが、今我々が頑張つてこられた一番の要因ではなかったかと思います。あの時点で、行政に依存してしまつたら、このようにうまくいってなかつたかもしれない。行政と対等の関係を保ちながら、我々としては独自の教育活動を展開することで村の活性化に貢献する、そういう紳士協定みたいなものと受け取っています。他からみれば、村はグリーンウッドに「丸投げしている」と見えるかもしれませんが、そこは20数年来の歴史と実績の中で、村との信頼関係ができていると思います。

——グリーンウッドでの体験教育活動の特徴は何ですか

辻 グリーンウッドの体験教育活動というのは、1年間という長期の山村留学から出発しています。それぐらいの期間でないと本来の教育効果は上がらないと思っています。ただ、1年間という長期間になりますと受入体制にも限界があつて、現在は20人の定員に制限しています。ですから、来たくても来られない子どももたくさんいます。もちろん、

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

「今は塾に通っているとか」、「野球チームを離れられないとか」、「家を1年間離れるのは心配だとか」という親や子どももたくさんいます。

教育効果を上げるためには、最低1年ぐらいは必要と思っていますが、現実には1年間という長期間を取れない子どもたちもたくさんいます。そのために、やはり短い期間のプログラムを用意した方がいいということで、夏休みとか、冬休みとかの学校の長期休暇に合わせたプログラムを充実させています。

昭和61年当時は、1年間の山村留学を意識した事前準備の位置付けで、いわばお試しのなものとしてポツポツやっていました。しかし、現在はしっかりとした短期のプログラムとして位置づけています。これは、平成5年からのことです。

現在では、2泊3日、4泊5日、あるいは2週間などの短期間のプログラムを立て、定員30人とか50人とかの規模でやっています。このプログラムには、1年間の山村留学で培ったノウハウを生かしています。山賊キャンプは、こうした考え方を取り入れて、森の中で自由に子どもたちが遊びながら体験ができるプログラムになっています。よく、2泊3日ぐらいのプログラムから始めて、3泊4日とか、1週間とか、2週間とか徐々に期間を延長する手法をよく見かけますが、グリーンウッドでは逆に長期の山村留学のノウハウを短期のプログラムに組み込むという手法を取っています。そういう意味では、独自のプログラムになっているのではないかと思います。

「気をつけ」、「並べ」といった規律で縛るより、子どもたちの主体性に任せたほうが面白くなるのではないかと、そういう考え方でやっています。そのほうが子どもたちも面白いはずだし、学び取ることも多いと思っています。マニュアルどおりにやるより、子どもの反応、感動、一緒にぶつかって暮らしをつくり上げたときの喜びのほうがはるかに大きいのです。



子どもたちとリーダーが一緒になったの山賊会議

——グリーンウッドでのキャンプの特徴はどのようなところにありますか

辻 元々は、この村にあった大家族の暮らしというものがモチーフになっています。つまり、お爺ちゃん、お婆ちゃん、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、妹など年齢の異なる家族の暮らしがモデルになっています。それを具現化したのが、山村留学・暮らしの学校「だいだらぼっち」です。それを参加しやすい形にしたのが「山賊キャンプ」で、学校などでやっている学級単位のキャンプとは随分異なります。ここのキャンプには一人でも参加でき、都会の子どもたちが単独で参加して、帰るときはたくさんの友達ができるというものです。異年齢とか、異なった地域とかの子どもたちが集まって、大勢で暮らすことは子どもの人格形成にとって意義あることです。

——山賊キャンプとは、どのようなプログラムですか

辻 山賊キャンプというのは、小学生、中学生を対象にした地域、暮らしに根ざした体験活動を通じて、心の豊かさと生きる力を育むことを目的としたプログラムです。コースとしては、2泊3日から4泊5日のベーシックコース12組、チャレンジコース10組、ミテリーコース2組と7泊8日から11泊12日までのスーパーコース4組があります。

プログラムとしては特別なものではありません。基本的には、3食のご飯づくりと寝るだけです。素朴なプログラムのように聞こえるかも知れませんが、要は子どもたちが何をやるかを決めるというのが特徴です。ただ、期間が短くなればなるほど自由度は低くなりますので、この場合はハイキング、川遊び、クラフトなど10種ほどメニューの中から選んで行います。



山賊キャンプは、子どもたちが何をやるかを決めるというのが特徴

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

まず、子どもたちとリーダーと一緒に山賊会議をします。最初に何をするかといったことから始めます。リーダーが、「君たち、何をしたい」というと、「わぁー」と一斉に手が挙がる。子どもには意見をまとめる力はありませんから、リーダーが主導して皆が「いいよ」というまで繰り返し行います。そして、子どもたちが決めたことは子どもたちに責任をもって守ります。というのは、「君たちが決めたのだから」と言うと、みんな「うん」と言います。もし、決めたことが無理であったら、また話し合いをさせます。これまでの経験からすると、自分たちで決めたことはよく守って行動しています。



クラフトに熱中している子どもたち（山賊キャンプ）

——キャンプの参加者募集はどのようにしていますか

辻 『どうやってこんなたくさんの子を集めるのか』と聞かれますが、ほとんどは口コミです。20年もやっていますが、内容が良くないと絶対に拡がりません。キャンプそのものはのんびりしたもので決して奇をてらっていません。ご飯を炊き、食事を作って、食べ、寝る、そういう素朴なキャンプです。子供にとって、用意されるキャンプより、自分たちで作る方が面白いに決まっています。そうした面白さが、口コミで伝わっていると思います。

毎年、リピーターが4割を超えていますから、その子が1人の友だちを連れてくればもう8割は埋まってしまう。5月に申し込みを開始すると、2、3日で半分は埋まってしまう、6月の終わりには全部埋まります。東京からだだと5時間かかり、バスに乗ってゲロゲロになってやってきます。東京に近いところにはたくさん受入施設があると思うのですが、ここを選んでくれています。

国などの助成金には、パンフレット作成などの広告宣伝費は認められていませんから自分でやらなければならない。NPOではそんなに広告宣伝費は出せませんから、いろんな

広報手段を活用しています。それと、こうした分野では、やたらに広告を出しても効果はありません。それより、良質な商品をつくり、地域と連携した良質の商品を提供し続けることが一番だと思います。いい商品をつくり続けていれば、必ず評価は下ります。この村にある暮らしを商品にしたということです。それが山賊キャンプという商品ではなかったかと思います。自分たちでやる、手間隙かけたキャンプが、今の時代のニーズにマッチしたのかも知れません。

——子どもたちの親の反応はどうか

辻 アンケートでは、全体的にはいい評価をいただいています。客観的な評価はよく分かりません。このキャンプでなければならぬというコアな親もあれば、何がしかの成果を期待している親もいます。半分ぐらいの親は、このキャンプとか、自然体験に意味があるというふうに反応してくれていると思います。9、10月には、思い出会とか、報告会を東京で開いています。これには300人ぐらいの方が来てくれます。また、キャンプに参加した子どもが、山村留学の4分の3ほどを占めています。こうしたことから、一定の評価をいただいているのではないかと考えています。

報告会は、いわばアフターケアみたいなものですが、そこには保護者、子どもをはじめ学生ボランティアとか、社会人も出席しています。そうした中で、キャンプに関するさまざまな話を聞き、また主催者としての説明を行っています。そうしたことが、次の評価に繋がってくると思います。

——スタッフの募集はどのようにされていますか、

辻 グリーンウッドのスタッフは現在15人で、うち2人は研修生です。彼らに覚悟を決めてもらうのが結構大変です。NPOでは世間並みの処遇はできませんし、先行き不安な業界でもあります。よくこんな厳しい団体に就職してくれるなと感心しているほどです。彼らの献身的な助けがなければ、とてもこうした活動の運営は維持できません。せめて村の役場の若い世代並の処遇ができればいいのですがね。

夏休みの期間は、大学や高校、専門学校にスタッフ募集パンフレットも配りますが、やはりこれも主体は口コミです。面白かったので来年も来たいとか、知り合いの紹介とか、先輩後輩の関係とか、最近ではボランティアのスタッフがでてきました。また、大学の単位取得のために来てくれるケースも増えています。

そういうことで学生が8割、社会人が2割といった構成です。学生の中には、子どものころキャンプに参加した高校生や大学生もいます。社会人では、学校の先生とか、公務員とか、看護師さんもいます。職場ではやれない、つくりえないことを経験するために来ているみたいですね。毎年、300人ほどの方が応じてくれますが、彼らに一定の研修を行うのも一苦勞です。

——野外活動では怪我や事故のリスクが多くなりますが、安全管理についてはどのようにしていますか

辻 野外で活動することは危険と隣り合わせです。切り傷、擦り傷、虫刺され、草かぶれなどは仕方ありませんが、食中毒とか、熱中症の防止などには気をつけています。こういう点は、保護者の意識が厳しくなっていますから、特に衛生面とか、子どもの健康面には気をつけています。

10年ほど前に起きたO-157事件^(注)のときは、現場としては大変な衝撃でした。それまでは川の水を沸して飲むのは当たり前でしたが、それ以降は保健所が許可してくれません。それで、キャンプサイトには、水洗場とか、簡易水洗トイレとかを設置しました。ある意味では、野外体験としての楽しみとか、自然からの学びが削ぎ取られてしまったことはちょっと悲しいと思っています。

あと、社会問題化しつつある不審者への対処があります。それにも気をつけなければならない。でも、それらにあまり神経質になりすぎると、折角の野外体験の本質を壊しかねない。過度な安全管理を進めていくと、もうキャンプはしないほうがいいという話になって、何もしないのが一番いいということになってしまう。この辺の兼ね合いを考えなければならない時代になっています。

10年前ぐらいは、サバイバルキャンプといえは「それはいい」と言われていましたが、残念ながら支持する層は少数派になりました。ほとんどの親は「子供はどうなるの」と心配する親が多くなりました。

なお、川遊びなど水を扱うプログラムの場合は、生か死かという生命に関わることがありますから、これについては十分気をつけるようにしています。



溪流遊びに興じる子どもたち（山賊キャンプ）

^(注) 平成8年7月、大阪府堺市の小学校42校で起きた病原性大腸菌（O-157）による食中毒事件。感染者9,492名、うち121名が発症し、3名の児童が死亡した。

——グリーンウッドの収支状況はどうなっていますか

辻 グリーンウッドにおけるキャンプ事業は、参加人員が年間約1,000人で参加費がだいたい3、4万円ですから、3,500万円から4,000万円の規模になります。山村留学事業は、年間20人で参加費が100万円ですからほぼ2,000万円はこちらの方は赤字です。したがって、山村留学事業の赤字をキャンプ事業が埋めているという状態です。その他に助成金や委託金が若干あります。

大きくみると自主財源としての事業収入が7割、補助金、委託金、助成金が3割となっています。そういう意味では、NPO団体としては理想的な方だと思いますが、そうはいっても運営には大変苦勞しています。そういう意味で、このグリーンウッズを維持運営していくためには、やはりキャンプ事業で1,000人ぐらいは集めないといけないですね。

一方、我々の人件費を含めて7割ぐらいは地元にお金が落ちています。あと食材費として1,000万円ほどかかります。これは周りの農家の方に契約栽培をお願いして、朝採った野菜が昼食には食べられるようにしています。子供たちが農家の人に「ありがとう」と感謝の言葉を伝えると、「それじゃ」ということで村の方はもっと美味しく安全な野菜を作ろうと頑張ってくれます。自分たちが作ったものが顔の見える子どもたちに食べてもらえ、かつ喜んでもらえるのです。

こうして互いに助け合い、連携することによって、村の活性化に様々なかたちで貢献しているのではないかと、そういう自負をしています。

10. 岐阜県立森林文化アカデミーの取組

——不思議さに驚嘆する感性をめざす——



豊かな森林に囲まれた木造建築のキャンパス（森林文化アカデミーHP）



【プログラムの概要】

- 名 称 夏の森林環境教育キャンプ
主 催 岐阜県立森林文化アカデミー
日 程 平成19年7月21日(土)～7月26日(木)
5泊6日
場 所 岐阜県美濃市曾代88
施 設 岐阜県立森林文化アカデミー・森のコテージ
対 象 小学4年生～中学3年生 25名
参加費 10,000円（宿泊・食費、運営費、保険料）
ねらい アカデミー学生の指導のもと、学校周辺の森や街をフィールドにして、自然の大切さや

話し手：岐阜県立森林文化アカデミー環境教育・インタープリテーション研究会 講師 萩原裕作氏

自

然の恵みを利用していく知恵を学ぶ。また、普段の生活ではやらない自分で調理したり、かまどを使ってご飯を炊くなどの生活を体

験

する。

——この「森林文化アカデミー」は、どんな特徴をもった学校ですか

萩原 ここはもともと林業技術を専門に教えていた林業短期大学があったところです。それが平成13年4月、地域が抱えているさまざまな森林や林業の問題を解決し、地域の経済を活性化していくことを目的とした新しいタイプの専修学校（地方自治型自由学校）として設立されました。

この学校の特徴は、これまでの学校教育の枠組みにとらわれなくて、この地に根ざした実践的な取り組みを主眼としています。教育の分野としては、山づくり、環境教育、木造建築、物づくりなどですが、いずれも実践的な知識や技能の習得に重点をおいています。また、こうした教育活動を通じて、地域に、そして将来的には日本全国に新しい波を広げていく震源地となることもこの学校の大切な役割だと思っています。

森林文化アカデミーは、将来の森林文化を担う人材を育成する「専修教育・学習部門」、森林・林業にかかわる個別的な技術、技能の研修を行う「短期技術研修部門」、及び一般の方々を対象に森林と森林文化にかかわる多様な講義を付与する「生涯学習部門」の3部門を設けています。このうち、生涯学習部門では各分野の専門家やユニークな講師等によるさまざまな学習講座を年間通じて開催しています。



森の不思議を分かりやすく解説するインタープリター

——環境教育には、どのように取り組まれていますか

萩原 この学校は、森と人をつなぐ人材を養成するために設立されました。学内には高卒以上を対象としたエンジニア科と大卒以上を対象としたクリエイター科があります。コ

ースとしては、林業家を育てる「林業コース」をはじめとして、「木造建築コース」や木のよさを伝える「ものづくりコース」、そして森林文化や自然と人とのかかわる人材を養成する「環境教育・インタープリテーションコース」があります。ここでいうインタープリテーションとは、目に見えたり体感できたりするものを通して、その背後にある意味や概念、メッセージを効果的に相手に伝える技術です。その場合、ただ単に事実を伝えるのではなくショッキングに伝えます。この技法は、もともとアメリカの国立公園で来園者に公園のメッセージを伝えるために始まったもので、最近では日本の公園のビジターセンターをはじめ博物館、美術館などさまざまな舞台で注目されている技術です。

この人材養成には、小林毅教授、八尾哲史准教授、そして僕の3人^(注)が担当しています。この3人のメンバーで、人々を振り向かせたり、気付いてもらったり、そして自分で動きをつくれる、あるいは刺激ができる人材を育てていくことに取り組んでいます。

一口に環境教育といっても、そのジャンルややり方はいろいろあります。人を振り向かせる仕方一つをとっても、人を介して刺激をするものもあれば、読み物だとか、映像とかの媒体を使ったやり方があります。しかし、そのメインはあくまでも自然です。自然と生活を結び付けて、気付いてもらうこと、考え・行動してもらうことが環境教育の一つの役割だと思います。その環境教育にかかわるメッセージを効果的に伝えるのが、僕らのインタープリター（解説者）かなと思っています。そういう意味で、インタープリテーションというのは環境教育のメッセージを伝えるための一つの技術だと思っています。



夢中になってサワガニを探している子どもたち

(注) 小林毅教授は、インタープリテーション教育活動にかかわるプランニング、プログラム開発、野生動物を素材とした環境教育のプロ。八尾哲史准教授は、都市計画・住宅政策・まちづくりなど地域政策のプロ。萩原裕作講師は、国内外のインタープリターとして、斬新な切り口と遊び心あふれるプログラムを得意とする。

——他には類がないとてもユニークな学校ですね

萩原 学校自体が本当にユニークです。面白いと思うのは、同じ学校の中で林業を学んでいる学生、ものづくりを学んでいる学生、建築を学んでいる学生などいろいろいて、彼らが「木」というキーワードで全員がつながっていることです。こういう学校というのはすごくユニークだと思うし、すごい仲間意識をもってやっています。

「こうなるといいな」と思うのは、将来彼らがそれぞれの現場で仕事をリードする人間になったとき、いろんな分野の人とつながりを持ちながら、あるいは意識をしながら広い視野でメッセージを伝えていける人材に育ってくれれば理想的だと思います。



子どもたちの感性を引き出すように仕向ける

——どのようにメッセージを伝えたいと思いますか

萩原 うまく人に伝えるには、人に「はっ」とさせるとか、「点火する」とか、「刺激を与える」とか、そういう部分がまず大事です。そうすることによって、もっと知りたい、やってみたいというモチベーションがどんどん上がって、その後、考えたり、行動したりする動きにスムーズにつながっていきます。だから、その部分をどう刺激するかということについても、授業や実習を通じて学生に指導しています。

この研究会の授業は半分以上が実習です。例えば、森に入って動植物の名前の調べ方や面白い見方などを体験することもあれば、地元の学校に出かけての出前授業もやります。出前授業では、学校の先生と相談しながらその意向を聞き出

し、その意向に沿ってどう表現したらいいか、そのためにはどういうプログラムを用意したらいいかなどを考え、実践します。

それから、学校ではインタープリテーションのテクニックとか、それを自分たちで考えて発表し互いに評価し合う、そういったことをやっています。また、実際の企画公募に参加したり、NPO をどう立ち上げたらいいかを学んだり、運営にかかわることもやっています。

——森林を使った長期体験の意義はどこにあると考えますか

萩原 ここでやっている森林環境教育キャンプは夏と冬の2回やっています、今回の夏のキャンプは5泊6日の長期型、冬のキャンプは2泊3日の短期型です。長期も短期もそれぞれのメリットがありますけれども、長期のメリットとしてはやはり子どもの意識の変化を連続して追うことができる。短期だと、わっと火が点いたところで帰ってしまう、もちろん家でもつなげていけますけれども限界があります。その点、長期キャンプは個人のペースに合わせて、それぞれの目標に向かってチャレンジしていくことができる、またその変化を経験の浅いリーダーでも感じるすることができる利点があります。

子どもたちは元来、不思議なもの、面白いものを見つける天才です。しかし残念なことに、それを一緒になって感動してくれる大人が傍にいなかったり、テレビやインターネットなど現実的な情報に刺激され続けたりすると、次第にそういった感情を表現しなくなり、やがてはその感情に蓋をしてしまうことがあるようです。そうしたものを、もう一度刺激して、呼び覚ますには、長期の自然体験というのは理想的な環境だと思います。



共同して火熾しから食事の準備をする

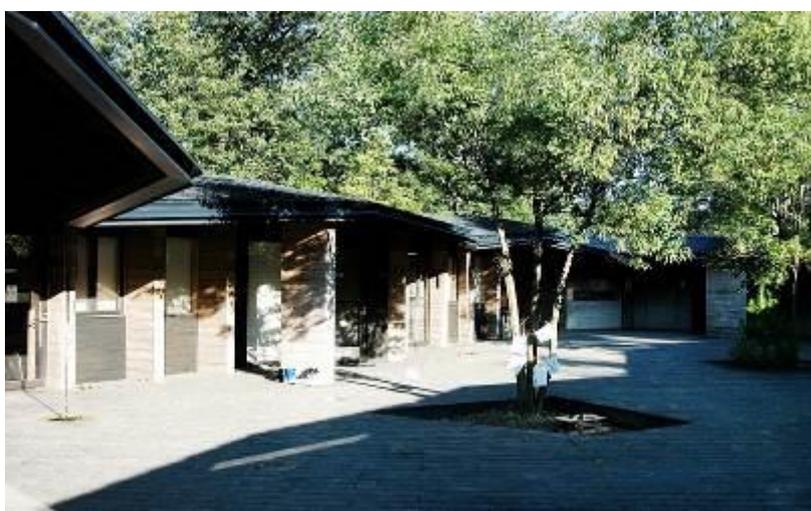
——自然にふれあう機会が少なくなった現代社会において、大人はどう対処したらいいと思いますか

萩原 できるだけ早い時期に子どもが自然にふれ、何かを発見したり、感動したり、そういう機会を作って欲しいと思います。そして、子どもが自然に触れている様子を親はぜひ見て欲しい。親子で参加してもらおうとか、一枚の葉っぱをクラフトにして持って帰るだけでも親への強いメッセージになります。子どもを通じて親にメッセージを送る、そういうことで親が気付く、そういうやり方もあると思います。

やはり子どもたちにとっては、発見する力、感動する力、そしてそれを一緒に理解してくれる大人が近くにいるということが大事だと思います。その場合、近くにいる大人は知識を必要とはしません。子どもと一緒に喜んで、面白いなと思ったり、自分が子

どものときどんな感覚で自然を見ていたとか、それを思い出すだけでいい理解者になれると思います。子供が「なぜ」と問いかけても、それは理屈を聞いているわけではなく、まして名前を聞いているわけでもありません。どんなふうに見えていたのか、そういうことを汲み取ってあげることが非常に大切なことなのです。

時々、学校の先生が子どもを森に連れて行くのを躊躇すると聞きますが、それは子どもの素朴な質問に対して的確に答えてやらなければならないといった責任を強く感じているからではないかと思います。植物の名前を知らないとか、鳥の名前を知らないとか、ということではなくて、どういうふうに見たらいいか、どういうふう楽しんだらいいか、ということと一緒に感じてもらえたらいいと思います。



モザイク型に配置された「森のコテージ」

——今回の森林環境教育キャンプのねらいは何ですか

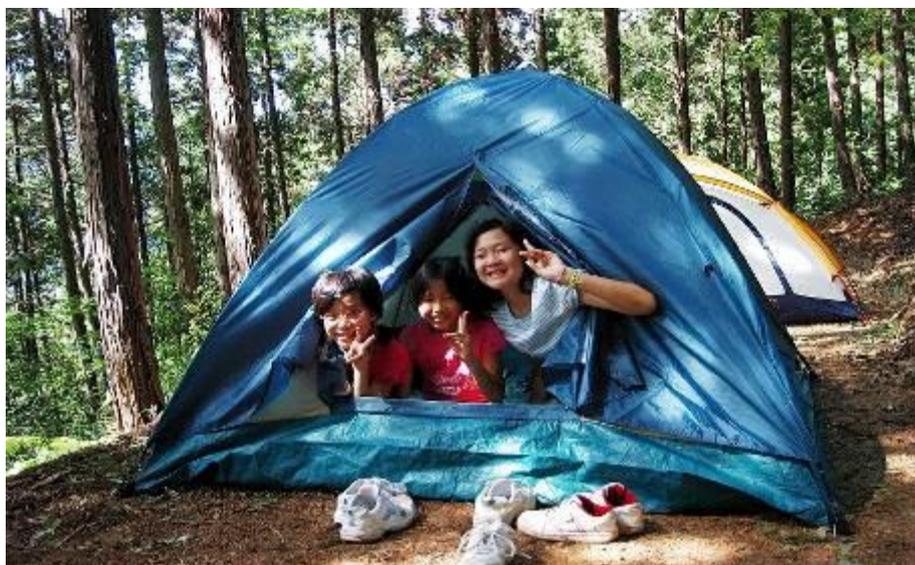
萩原 今回の森林環境教育キャンプのテーマは、アメリカの研究者レイチェル・カーソンが提唱するセンス・オブ・ワンダー（不思議さを驚嘆する感性）です。彼女はすごく素敵なメッセージ^(注)をたくさん残しています。

^(注)「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちが出会う事実の一つひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものに触れたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。消化する能力がまだ備わっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知れた

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

今回の森林環境教育キャンプは、だんだん子どもたちが自然に近づいていくようなプログラムになっています。まず、子どもたちは家を離れ、知らない子どもたちと一緒に生活することになりますから、どうしてもストレスが溜まります。そこで1泊目と2泊目はコテージに泊まります。そこで友達が出来て仲良くなってきたら、3泊目は森にテントを張ります。そして、4泊目でテントを出てシュラフ（寝袋）だけで夜を過ごします。ここが自然に最も近づいたクライマックスです。

最後の5泊目は、コテージに戻って泊まります。最終日にコテージに泊まるのは、このキャンプで体験した、あるいは刺激されて芽生えた感性を現実の生活に戻っても継続できるようにゆっくりと消化してもらうためです。いわば、最初のコテージ泊は準備体操、最終日のコテージ泊は整理体操のようなものです。



森の中に設営したテントで寝泊りする

——自然の中での体験や感動は、どこかで蘇ってくるということですか

萩原 そうですね。蘇ってくると思います。ただ、生活につなげる意識を持たせないとただのイベントで終わってしまいます。今までは気付かなかったけれども、学校の帰り道で面白いものを見つけ、発見することができる。自然が少なくなっているとはいえ、そういう感性でみると身の周りにはたくさんあります。そういう感性が持てるようになれば、一つの成果といえると思います。

がるような道を切り拓いてやることのほうがどんなに大切であるか分かりません。（レイチェル・カーソン著「センス・オブ・ワンダー」／上遠恵子訳）

——長期体験活動プログラムはどのように立てていますか

萩原 やはりプログラムの組み方からすれば、短い期間のプログラムでは、どうしても忙しくなってしまいます。極端にいうと、プログラムどおりにやらなければいけないことになる。時間的な余裕があれば、子どもたちに考えさせ、いろんな失敗を繰り返しながら組み直し「待つこと」ができます。そこに長期体験活動の意味があると思います。

今回のキャンプについては、リーダーが一応のプログラムは立てます。でも、それはあくまでも予定であって、理想としているのは子どもたちが「これをやりたい」という声が出てくるまで刺激して、どこまで応えられるか、どこまで引っ張り上げられるか、どんな面白いことができるか、そこら辺を試されていると思います。

僕は、最初のプログラムからできるだけ外れる方が面白いと思っています。そういう柔軟な対応をする、ハプニングがいっぱいある体験活動ができればいいと思います。それが森林でやる一番の意義だと思いますね。



リーダーに薪割りを教わる子ども
だんだんと慣れて自分でやりだす

——ハプニングは心の動機づけになるということですか

萩原 昨日、ある班のリーダーがアクティビティーをやるために森に入った時、大きなアオダイショウが藪の中に隠れているを見つけました。そこで子どもたちを呼び集め、「この藪の中にヘビが隠れているよ」と言いました。すると子どもたちは真剣に藪を見つめ、やっとのことで自分の目で見つけるとビックリすると同時に、まるで宝物でも見るかのようにじっとりと観察していたそうです。そんなことで3、40分は時間がずれてしまいましたが誰も気にすることはありませんでした。

お膳立てしたプログラムは予定どおり進むかも知れませんが、感動や面白みは損なわれます。やはりハプニングの方が、子どもの感動は大きく、印象は確かなものになります。

一口に野外キャンプといっても、さまざまなねらいがあり、全部を一遍にやるというのは難しいのですが、それぞれの要素を少しずつ採り入れることは大事です。

キャンプの最初の頃は、食器をリーダーたちが洗っていますが、その様子を見て子ども

たちはだんだんと「自分たちで洗おう」という気持ちになってくる。刺激することによって、自分から「料理を手伝いたい」という声が出てきたらしめたものです。やらせるのではなくて、自分たちからやりたいという気持ち、動機づけが大事だと思っています。

——森林の中にはさまざまなリスクが潜んでいますが

萩原 極端な話、リスクを全部なくそうと思ったら山を裸にするしかありません。小枝とか、落ちているものを全部取り除かなければならない。そうすると、障害物を避け、危険を予知して身を護ることができなくなる、そういう人間になってしまう。森の中には小枝や邪魔な木があるのは当然で、それが自然です。危険と感じれば自分で避ければいいし、越えられるものであれば越えればいい。そういう危険を予知する力、自分を守る力を身につけるのが森林のいいところです。過度に安全を確保し過ぎると、森林体験の意味がなくなるし、むしろ逆効果になりかねないと思います。

——最近、踵をずって歩くとか、踵を潰した靴を履いているとか、靴ひもをわざと結ばない子どもを見かけます

萩原 森では、そうした歩き方は通用しません。森の中を歩けば、そうした歩き方は自然に矯正できるし、それ以外のことも矯正できるかも知れません。そういう意味で、森にはいろんな刺激が存在すると思います。周りが「こうしろ」ではなくて、自分から気付いて身に付けるものが一番です。主催者の立場としては、どこまでいい場所をつくってやるか、うまく乗せることができるか、が役割です。それを子どもらが体験し、次につなげていくということが大切ではないかと思っています。

—— 一般には女の子が多いのに、このキャンプでは男の子が多いですね

萩原 今回は、森の中でシュラフだけで寝ることになっていたのも、女の子が少し敬遠したのかも知れませんね。男女同権の時代ですから、どちらが多いか少ないかは特に気にしていませんが、野外で元気に駆け回る男の子が増えることは大歓迎ですね。

—— このキャンプのリーダーたちは、どこから来ているのですか

萩原 リーダーは、この学校の学生が務めています。彼らはいろんな個性をもっていますが、子どもたちと接触することで互いに刺激を受けていると思います。見ていると、リーダー自身もかなり悩んでいる様子を見受けます。キャンプを通じてそうした悩みを一つ一つクリアしていくことが、リーダーの養成に繋がっています。いろいろなことができるようになったとか、どうしたら子どもとうまく付き合っていけるだろうとか、いろいろ悩んでいるようですが、そういう課題をクリアすることで成長しているようです。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

—— 一般には参加者を集めるのに大変苦労していると聞きますが、このキャンプではどうですか

萩原 ここは地元で根ざした活動をしていますので、参加者の半分はリピーターです。ですから、もう3回も4回も来ている子どもたちもいます。地域の人たちの理解もあるし、それほどの苦労はしていません。募集は学生たちがチラシを作り、地元の学校に配っています。そういうことで参加者が募れますので、学生としてはあまり勉強にはならないかもしれませんね。



ウラジロ（羊糞）をグライダーにして遊ぶ子どもたち

もう1つの理由は、参加費のことがあります。学校の施設が使えるので、経費的にも抑えることができ、また授業の一環であるため学生の食費や生活費はすべて自分たちで払っています。そうしたこともあって、このキャンプの参加費は1万円に抑えることができます。民間では通常1日1万円が相場ですから、親の負担が少なくて済むということが参加の動機につながっていると思います。参加費は、主に食材、寝具のクリーニング代、教材費及び傷害保険料に充てています。もちろん、食事のメニューなどは学生リーダーが一生懸命に考えて安く抑えていることも大きく貢献しています。

年に数回の活動なのであまり影響はないと思いますが、安い参加料にすることによって民間の活動を圧迫しないように気をつけています。授業の一環としてやっているのです、どうしても導入的なプログラムしかできませんが、子どもたちに自然体験活動の楽しさを知ってもらい、次は民間の活動に参加してもらえれば理想的だと思います。